3994

琵琶法師
後藤青蝸編

琵琶歌獨吟集 全

東京 松榮堂發行

221
894

特22
650

凡例

一　本書は薩摩琵琶歌に於いて、最も愛吟せらるゝもの約百段を收めたる歌章の新歌を加へたるものにして、題して琵琶歌獨吟集と云ふ。

二　古來世に流布せる所の琵琶歌と稱するもの多しと雖も吟唱するに當りて、句調の穩當ならざるもの、即ち琵琶の絃に合はざるもの、あるもの、同一のもの、是等は皆之を修訂せるを以て等しく琵琶歌にして之を他に較ぶれば多少の相違ある所以なり。

三　琵琶歌を吟唱するに當りて音調の長短高低等のごとき、各多少其の趣を異にするは免るへからざれば古來一定の節なしとせざる所以なるべし然れとも本書は多年の愛好によりて明かに其の啓發せる所の節を附せり緒言の末尾に就いて見るへし。

明治三十八年秋

編者識

明治
38 10 19
内交

目次

○緒言……一頁
○琵琶の彈き方……四
○日本海大海戰……十三
○旅順開城……十五
○遼陽占領……十七
○奉天附近の會戰……十八
○常陸丸……二十
○國船……二十二
○松嚊……二十三

○梅が枝……二十四
○春の調……二十六
○名所盡……二十七
○老蘇の森……二十九
○群島……三十
○狂女……三十一
○薄が本……三十三
○武藏野……三十四
○華の香……三十五
○墨繪……三十七
○王照君……三十九

○赤壁……四十一
○蟬蛤……四十一
○榕の華……四十三
○增の草……四十四
○潯陽江……四十四
○城山……四十八
○臺灣入……五十
○僧月照……五十三
○雪の曙……五十五
○兒島高德……五十六
○高德題櫻……五十八

○遠　矢……六十
○物狂ひ……六十四
○鶯の夢……六十五
○錦の御旗……六十七
○小　督……七十
○那須與市……七十四
○忠　度……七十六
○川中島……七十八
○虎狩り……八十一
○本能寺……八十四
○千早振……八十八

○玉政復古……八十七
○石童丸……九十二
○俊基朝臣東下り……九十五
○菅　公……九十九
○勿來關……百二
○威海衛……百二
○夜討曾我……百五
○那須與市……百六
○實　盛……百八
○重　盛……百十一
○阿新丸……百十二

◎初段……百十二
◎二段……百十五
◎三段……百十七
◎四段……百二十
○楠公……百二十三
◎初段……百二十三
◎二段……百二十七
○木崎原合戰……百三十
◎初段……百三十
◎二段……百三十五
◎三段……百四十

○後藤……百四十五
◎初段……百四十五
◎二段……百四十八
○四條畷……百五十
◎初段……百五十
◎二段……百五十一
◎三段……百五十二
○扇の的……百五十三
◎初段……百五十三
◎二段……百五十七
○小松の操……百六十一

◎初段……百六十一
◎二段……百六十二
◎三段……百六十四
○吉野……百六十七
◎初段……百六十七
◎二段……百七十
○鎌倉の宮……百七十三
◎初段……百七十三
◎二段……百七十六
○島原合戰……百七十九
◎初段……百七十九
◎二段……百八十九
◎三段……百九十八
○小敦盛……二百七
◎初段……二百七
◎二段……二百十三
○粟津の露……二百二十
◎初段……二百二十
◎二段……二百二十
◎三段……二百二十七
○形見の櫻……二百三十三
◎初段……二百三十三

◎二段……二百三十七
◎三段……二百四十二
○磐の駒……二百四十六
◎初段……二百四十六
◎二段……二百五十二
◎三段……二百五十四

琵琶歌獨吟集

琵琶法師　後藤青蝸編

○緒言

頃日專ら流行する所の琵琶歌なるものは、古來より世に持てはやされしものなれども、これを琵琶に合せて吟唱せんには、或ひは其の節の合ひがたきものもあるべし。又絶對に吟唱しがたきものもあるべし。即ち琵琶歌としての價値なきものなり。己れは少壯のときより、斯道の門に遊びて、琵琶の節は勿論其の歌の句調に就いて、聊か研鑽するところなきにあらず、然るに頃日、親友の某、一日坊間に流布する所の琵琶歌を輯めたる小冊子數冊を携へ來たりて、己れに示し、且つ曰く、斯くのごとく數冊の琵琶歌に

就いて、其の同一のものを對照するに、節附の異なるは、何に依りて然るや例へば甲書に於いて、大聲これを吟唱すべしと示せるものも、乙書に於いては普通の高聲を以てすべしとせられたるが如きは、其の意の在る所を知ること能はずと。乃ち其の書を取て、これを閲するに、某氏の説のごとく然るものあり。抑も琵琶なるものは、初め唐土より傳來したるものにして其の當時にありては、左まて流行せざりしが、武門の漸く盛なるに及び、陣中の徒然を慰め、且つ士氣を皷舞せんがために、將士の琵琶法師を召して彈奏せしめたるより、漸次隆盛を來たしたるものゝ如し。是は即ち俗に所謂平家と稱するものにして、現今の薩摩琵琶にあらざるなり。降つて筑前琵琶なるもの世に出づるあり、又薩摩琵琶の持てはやさるゝに至れるなり、多少小異の點なきにあらずといへども、皆平家琵琶より出でしものなり。薩摩琵琶といひ、筑前琵琶と云ふも、是等の國に於いて、專ら流行せしより起りし名稱に過ぎざるものならんと思はるゝなり。而して其の節のごときは、多少相異の點ありといへども、大體に於いては、殆ど一致したるものといふべし。然るに今坊間に流布する所のものにして、其の節に相違の點あるは、誠に不審に堪へざるものなり。然れども、思ふにこれが節を附けたる人々は、必ずや思ふ所ありて然るならんと察せらるゝなり。其の可否のごときは、これを言ふに忍びずとて、某氏に告げたるに、大に了得せられたるものゝごとし。仍ほ己れに完全なる節を附けて、公にすべしと迫り、且つ自から其の勞を取らんことを望まれたり。依て舊記を取出し、こゝに一篇の冊子となすに至れるなり。

文中○を附せしは大甲（たいかん）、即ち高音を以てし、△は中音、◎は崩れ、即ち神速に

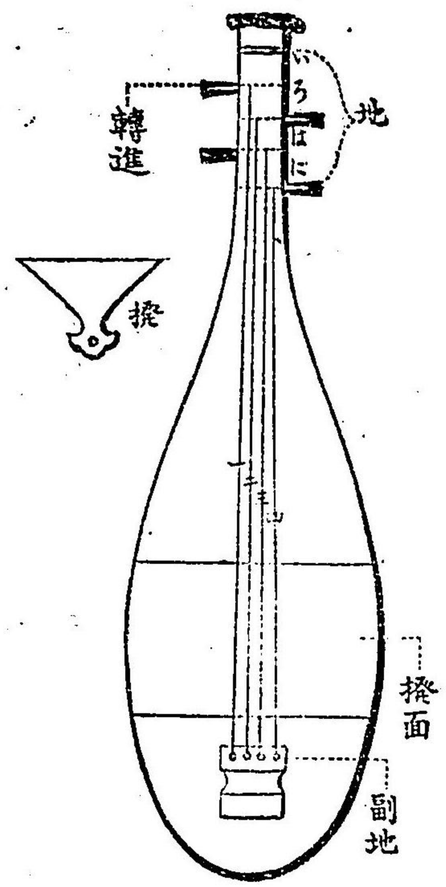
吟唱すべき個所、其の符號なき部分は地音として、普通の語音を以て語るべきを示したるものなり。又『を』を附けし所あり。或る一曲の最初より、初めの『まて』は、稍低き地音を用ゆべく、それより、符號に從つて吟唱すべきことを示したるものなり。又丶の印は、吟替りを指示したるものにして、これより調を變ずるものとす。之を要するに、音調の長短のごとき、殆ど一定せずといふも不可なければ、能く文意を味ふて、宜しきに適ふべし。

○琵琶の彈き方

琵琶を彈奏せんとするには、先づ俗に所謂調子を合すべし。而して其の調子の如きは、如何なる程度に於いて合すや、是は人々の任意に依りて、多少の差異あるべきは勿論なりと雖も、これを要するに左の如くして可なり。

(い)一絃と三絃は、俱に同音の調子とす。
(ろ)二絃は、三絃より少しく低くすべし。
(は)四絃は、三絃よりも上ぐべし。而して二絃と三絃との中間音となすものとす。

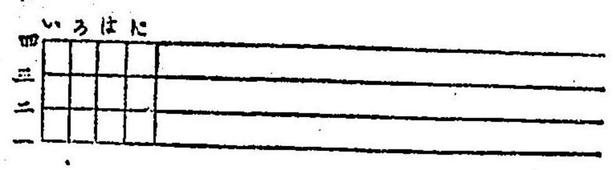
第一圖



抑も此の調子なるものは、これを聽く人の如何に由りて知ることを得るものにして、到底これを筆にすること能はざるは、識者を待たずして知る

べきなり。然れども茲に初學者のために、其の標準ともなるべきものを擧げんに、琵琶歌をうたふ其の聲の調子は、琵琶の一の絃の調子に依りて、相上下するものなり。故に第一の絃の調子にして高きときは、これを謠ふべき聲調も亦自から高からざるを得ざるものたるや勿論なり。

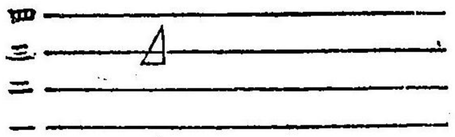
第二圖



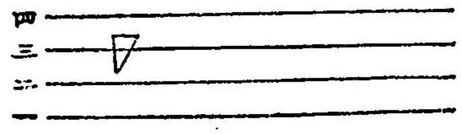
茲に掲げたる所の四條の横線は、琵琶の四絃をあらはしたるものにして、『いろはに』は其の地にして指にて押ゆる部分、『一二三四』は其の四絃なり。これを向ふに向けて横に立つるときは、上より一二三四の順序となるべし、即ち『一』は上位に、順次下りて、四は下位にあるものとなりて、地の所を左手にて、持てるときの如くになるものなり。

琵琶を彈ずるに、打撥、掛撥あり、打撥とは撥にて、絃を打つがごとくに彈くものにして、『チャン』と云ふ音を發すべし。茲に擧げたるものは、第二絃に於ける打撥の一例なり。

第三圖



第四圖

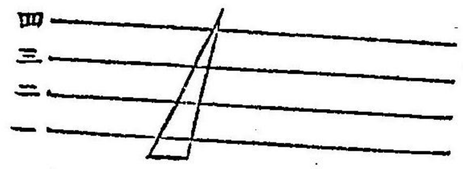


掛撥とは、撥を絃に掛けて彈ずるものにして、『ギン』と響くものとす。

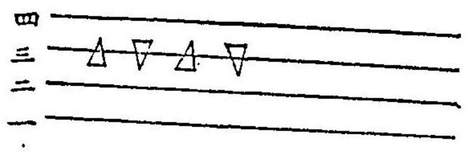
以上掲ぐるところの二種の法、即ち打撥掛撥に代用せる符號を以て、以下これが說明をなすものなれば、▽は打撥、△は掛撥なることを記憶せらるべし。

第五圖に掲げたるものは、第一絃より第四絃に至るまで、一度に打撥を行ひたるものにして、其の用所のごとき、左まで多からず。又第六圖は、初めに

第五圖



第六圖



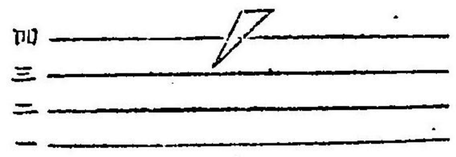
打撥、次に掛撥それより又打撥、掛撥と順次これを繰返すべきことを示したるものにして、『チャン』(打撥)、『ギン』(掛撥)と音のひゞくものなり。

第七圖に掲げたるものは、第六圖のものと同一の調子なるが如しといへども、其の全く異にして、『チャラ』『チャラ』とひゞくべし。而して前の『チャン、ギン』よりは稍早く撥を運ばしむるものとす。

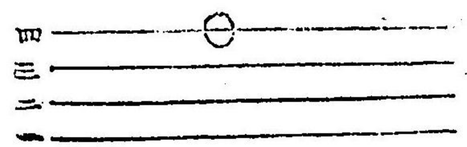
第八圖に示したるものは、これを稱して『シッチャン』といふ。是は、撥にて一回琵琶の腹板を打ち、それより直ちに第四の絃に掛撥を加ふるところのものなり。

第七圖

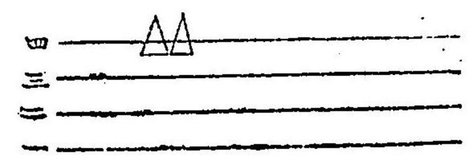
第八圖



第九圖



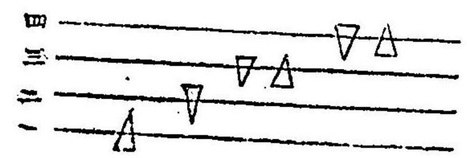
第十圖



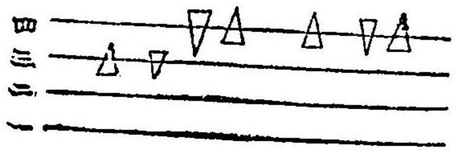
第九圖に示したるものは、通常これを『リ』と唱ふるものにして、撥にて彈ずるものにあらず、左手にて琵琶の上部を支へつゝある指の中、其の薬指にて、第四の絃を輕く打つことを示したるものなり。

第十圖に示したるものは、打撥二度を連續して、其の間少しも休止することなく彈じ、其の終るや、『ヤッ』と唱ふるだけの間を隔つることをあらはしたるものなり。

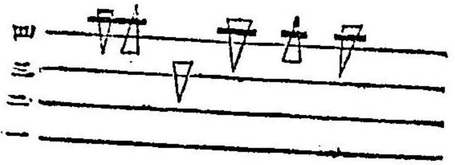
第十一圖



第十二圖



第十三圖



分を他の指にて押ゆる場合を示したるものなり。

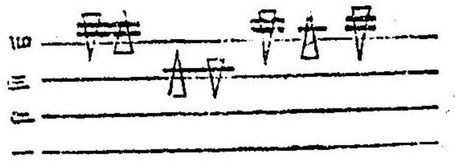
第十三圖は、打撥と排撥とに拘はらず、左手の指にて、絃の一部分を押へて彈ずることを表示したるものなり。

第十四圖は、第三絃と第四絃との一部分を左手の指にて押へて彈ずる場合をあらはせり。

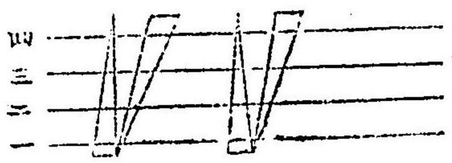
第十一圖に示したるものは、いづれの絃も、左手の指にて押ゆることなく、唯彈ずることの場合のみを擧示したるものなり。

第十二圖に示したるものは、第三絃第四絃の各一部分をば、同時に一度に押へ、これと共に他の一部

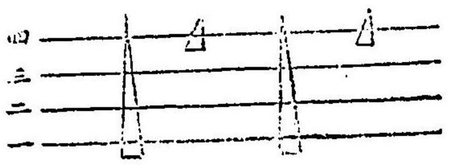
第十四圖



第十五圖



第十六圖



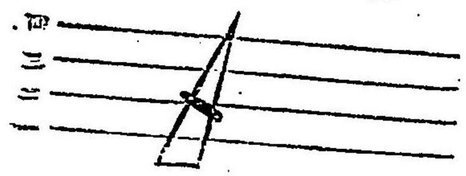
撥のみを行ひしことを表示したり。

第十七圖は、第一絃より第二絃まで同時に打撥と掛撥とを連續して行ひしことを表示したり。

第十八圖に示したるがごときは、第一絃より第四絃まで、同時に打撥を行

第十七圖

第十八圖



ひ、且つ第二絃は、これを押へたるまゝに彈ずることを表示したり。若し其の點《此圖の第二絃にある》が第三絃にあることを表示したるときは、第三絃を押ゆることを示すなり。其の他之に準ず。

琵琶は、我邦に於ける三味線のごとく、其の胴を右の膝に載せ、其の上部を右腕に抱へるがごとく輕く押へ、右手に撥を持ち、左手は、地《前圖參照》の部分に當て、右手にて彈じつゝ左手の指にて、其の他の或る部分を押へ又は押へずして彈ずるものなり。唯三味線と相異なるものは、地の押ゆる場所の一定したるに在るのみ。

本書に掲げたる符號に依りて、其の音符の解説をなさんと試みしが、勢或る一例を示さゞるを得ず。斯くの如くするときは、本書一冊を以てするも尙ほ且つ足らざるを覺ゆ。故に僅に其の彈き方の一端を掲げ、兼ねて聲調の如何を知得せしめ、聊か獨吟者の參照に供するのみ。

○日本海大海戰

强敵露西亞が繫ぎたる、一樓の望をかけたりし、『三十餘隻の大艦隊』我が關門の對馬なる、東水道打ち踰えて、目ざせる先は浦潮斯德、端なくてゝに大海戰を開かるゝ。我が艦隊の哨艦は、和泉艦とて名もたかく、遙に出てゝ敵艦の、動靜如何にと見てありし。折しもはるか天涯に立ちのぼりたる煤煙はスハコソ敵艦來たりたれ。遙に、避けて、敵艦を、やり過ごしてはこれと共

に、同じき距離を保ちつゝ、我が關門の對馬なる、東水道へと誘致せり。和泉は夙に此の事を、我が主力艦隊に電信し、首尾よく日本海へと誘なひたり。主力艦隊これを知り、作戰計畫こと〴〵く圖に中りたる將卒の肉は躍りて骨動き、三面よりぞ敵艦をつゝみて擊出す大砲は、轟々ひゞき海原にあがる白煙水煙、敵艦大に狼狽し、逃ぐるに道なく應戰し、續けて擊ち出す砲丸は、あはれつたなく、海底にしづみし樣よ、そのあはれさに、我れは思ひのまゝに行動し、忽ち數隻を擊沈め、或ひは火災を起さしめ、隱岐の西なる竹島の邊にさまよふ艦隊の戰鬪巡洋驅逐艦、其の數五隻を捕獲なし、賴みにたのみし敵艦を、殆ど擊滅なしたるは、實に勇ましことなりき。朝日にかゞやく軍艦旗、今日はひとしほ輝きて、日本海にぞひるがへる。頃は明治三十八年、五月の末の七日なり三日にわたりしことゝかや。

○旅順開城

時明らけく治れる、我が日の本の國運を、危殆ならしめんとしたる、暴戾倨慢の露西亞國、金城湯池と賴みたる、旅順口に籠り居て、數月の攻圍に堪へたれど、其の一月の一日に、降旗をかゝげて我が軍に、『降服なせるは是非もなし』抑も旅順の地は、日清戰役の結果により、清國より我れに割讓したる土地なるに、恫喝虛僞を敢いて、少しも憚るところなき露西亞は、獨逸と佛蘭西二ヶ國を、誘ひなして我國に、陽に忠言陰に姦謀、めぐらしつゝも遷さしめ、其のまだ舌の根の乾かざるに、名を租借にかりて奪ひ取り、經營數年、幾億萬圓の巨資を投じ、金城鐵壁を築造なし、二十餘萬噸の艦隊を浮べ、威風堂々、清韓を壓し、我れを壓迫し、世界に誓へる滿洲撤兵をなさゞ

るのみかまず〳〵軍隊を增遣し、恫喝の下に我れを屈服せしめんとなしたりき。』臥薪嘗膽こゝに十年、怨みかさなる露西亞國、いて膺て懲らせと公憤を發したりける大日本國民、いかて打擊を加へざる。畏多くも宣戰の大詔勅は煥發し、こゝに干戈を交へしは、明治三十有七年、二月初めの八日なり。』我が艦隊は、十數回の攻擊をなしけるが、敵艦隊は損傷し、行動の自由を失ひける。こゝに東鄉大將は、遼東半島を封鎖し、乃木大將は、數萬の貔貅を率ゐて、旅順口をば攻圍し、蟻のはひ出づる道さへ閉ぢぬれば、敵將『ステッセル』は、死力を盡して防禦なし、『クロパトキン』の大軍も、しば〳〵南下を企てゝ、其のたびごとに破れたる、さまこそ實にやあはれなり。』旅順の死命を制すてふ、標高二百三の土地、我が精鋭なる攻圍軍に攻略せられ、こゝに引き上げたりける攻城砲、旅順の市街を見下して、休む隙なく打ちければ、旅順市街は彈の雨、敵もゝはやかなはずとや悟りけん、遂に揚げたる其の白旗、仁と高義に富みたりし、我が軍指揮の乃木大將、彼が降服をさし許し、十年の昔一たび我が手に取りし旅順口、こゝに再びひるがへる、光まばゆき日章旗、東洋平和の主人公、支那朝鮮もとも〳〵に我が日の本の國光を、仰げる時になりにけり。仰げるときになりにけり。』

○遼陽占領

敵の陸軍總大將『クロパトキン』兵器彈藥の滿てるに及び、大言壯語しつる樣、やがて日本軍と會戰し、『一舉旅順口を救はんといきまきたり』半歲の久しき遼陽に立籠り、有らゆる防禦工事を施して、作戰計畫に怠りなかりけるが、我が軍が三方より攻めたりしに、前軍いつし敗れはて、死力を盡して

防守せる首山堡も、我が砲彈に居たゝまらず、右往左往に逃げまよひ、兵器彈藥投げ捨てゝ、奉天指して退却し、見苦しき敗軍をなしたるは、實にこゝちよき次第なり。さるを『クロパトキン』、『世に言ひ觸らして、豫定の退却なりとなし、敗走せしを言はざるは、其の苦心の跡も察せられて、あはれと云ふも憐なり。

○奉天附近の會戰

遼陽に敗れ沙河に擊たれし、敵の大將『クロパトキン』、奉天附近に主力を集め、專ら防禦に餘念なし。『深謀遠慮の滿州總司令官陸軍大將大山巖、これに從ふ兒玉將軍、これまで敵を敗りしが、更に大敗を被らしめんと謀り、野津乃木奥川村の大將等、こゝより彼處より奉天さして進擊し、微塵に碎かん計畫なり。さる程に『クロパトキン』は、我が主力が東にあると思ひなし、手兵をやつて戰ひけるが、我が一軍は奉天の西北さして進出し、潮の湧くがごとくに攻め寄せたるに、其の驚き言はん方なく、もはや勝算覺束なしと思ひけん、はや傳へなる退却の命令に、浮足立ち、露西亞軍、退路を斷たれて狼狽し、萬をも踰ゆる軍隊を、俘虜となすをも顧りみず、鐵嶺さして混亂の、姿とゞめて敗走したり。我軍いかで追擊せざるべき、新手をかへて追擊す、息をもつがせず擊ちしかば、豫備に築きし鐵嶺の、堅牢無比の砲臺も、遂に用ゆるに暇なく、四十餘萬の露西亞軍、みぐるしくも敗退し、開原昌圖をこゝろざし、唯身を以て北ぐるのみ。世界に名ある大戰も、斯くまで脆く敗れしものなしとかや。この事の世界につたはるや、我が精鋭の軍隊を、誰とてほめぬものはなし。』

○常陸丸

征露の軍やう〳〵に、進み〳〵て南山の『險阻も既に打ちやぶり』音に聞えし要害の、旅順口をも閉塞せられ、鷲の棲むてう滿州も、君が御稜威の旗風に、今は靡かぬ草もなし。心鋭紫の島はなれ、玄界灘のたゞ中に、吹く朝風に日の丸の、旗ひるがへす常陸丸、土佐も進みて續きゆく。船路はなれて白浪よるべに如何に遠からず、何ぞ荒ぶるあら潮の、逆巻く中に黑煙は、只一筋に走り來て、我れを取り巻く敵の船、こは何事と問ふ間もなく、亂射亂擊雨あられ、進み遁れんひまもなく、千里を走る猛獸も水に入りては如何にせん、萬里を翔ける大鵬も水には翼折れぬべし。心ばかりは早れども、運送船の悲しさは、進退こゝに極まりて、詮方なくも敵艦に、任せはてしは是非もなし、佐渡は如何と眺むれば、霧にまかれてわからねど、同じやうなる運の末、輸送指揮官須知中佐、是れまでなりとや思ひけん、大久保少尉の捧げたる、聯隊旗をば手に轉じ、都の方を伏しをがみ、火をば放ちて燒きたれば、各將士もそれ〳〵に、貴重の品を燒きすてぬ。此の有樣を打ち見つゝ、中佐は軍刀手に握り、無念の涙はら〳〵と、落つるを袖に打ちはらひ、萬歲となへて悠々と、腹かき切つてぞうせにける。つれなる將校はじめとして、下士卒に至るまで、同じ枕に伏せにけり。海に投じて死するあり。敵はます〳〵加ふれば、甲板上にたちまちに、屍の山を築きつゝ、血潮を玄海の浪あざれて染みにける。哀れなるかな常陸丸、君萬歲の聲細く、日は六月十五日、夕日の浪にちらされて、あやめもわけぬばかりなり』實に誠忠のつはものが、十年の間朝夕に、磨ききたへし日本刀、精氣こもれる切味を、ためさん敵を前に

見て、遺恨の刃いと太刀も、報いんこともなくなりて、駒の蹄に滿州を、ふみにじらぬも無念なれ。うらるの山を踰えて、あらまし事も幻か、思へば無念の極みなり』嗚呼一聯隊の我が兵士、水温く屍は消えしかど國に盡せしまつらをの、清きその名は世々にひゞき、灘に立つ浪の、絶ゆる時なく仰がれて、末まで遠く流るらん。』

○國船

雲に聳ゆる高山も登らばおどかす越えざらむ、空を浸せる海原も渡らば、終に渡るべし』我が秋津洲は茜さす、東の沖の離れ島、例へば海のたゞ中に浮べる船にさも似たり』二萬方里の船の中、四千余萬の乘組あり、船の主の指揮を受け、文明海に進み行く、水主楫取多かるに、我等も楫子の一人なり。船の行手は和田の原、八重の汐路の遠ければ、颶風逆巻く折もあり、高浪荒るゝ時もあり』船手の業に習はずば、颶高浪凌ぎ得て、思ふ港に如何て着くべき。』

○松囃し

新玉の年立ち歸る春の日に、君が齡は千歳ふる松囃しとて數ならぬ我等如きも許されて聞くも中々面白や』皷は四海の波の音笛は龍王の吟ずる聲、名も高砂の尉と姥是ぞ盡きせぬ妹脊とかや』神の御前の鈴鹿山、惡魔を拂らふのみならず、弓矢の譽、殘されし、田村麿の御威勢は、今が世迄も楪の注連引き廻す井筒より、汲めど盡きせぬ若水は、老を養ふ便りとかや』扨て其の次は春の花、都に聞えし三條の古鍛冶宗近は、心正直にして神慮に叶

ひし名劒を造り出して今は早大平の世となりて古き詩にも有るぞかし。長生殿の裏には春秋に富み不老門の前には日月遲しと申せし事も、皆其心をば學ばれて、今彼の御代といふつげの取々なれや梓弓『矢竹心の一つだに、又兵の交りは互に頼みある中の酒宴なり』

○梅が枝

春は先づ咲く梅が枝に、谷の戸出づる鶯の、聲も聞えて高瀬棹す、佐保の河原に繰り掛けて、最と珍しき岩躑躅『言はぬ思ひの色にしも、井手の山吹藤咲きて松にも花を春日野の、緑榮ゆる』若草に荒れたる駒も夏來れば、御法の門に兼て後世を願はざる、人の心が卯の花や、橘匂ふ五月雨に、山郭公音づれて、最とど昔は戀衣、重ねて袖や濡らすらん。蘭省の花の時、錦張の下廬山の雨の夜に、草庵の中と賦し置ける。されば詩の心にも同じ思ひの菅莚敷き忍びたる淋しさを何を種とや秋萩を、植ゑて涼しき庭の萩薄も月も穂に出でゝ、亂れ亂れしあだし野の草葉に置ける露の身の消ぬ便りを松虫の、聲さへ今は霜枯れて、雪白妙に故郷を、哀れと云へる人もなし、恨めしの浮世かな嗚呼恨めしの此世かな。諸行無常の春の花は、是生滅法の風に誘はれ、生滅々已の秋の月は寂滅爲樂の雲に隠れ、僅に此世に留まらず、併し又浮身を捨てんとは思へども、流石又輪廻の浪の立つ間にも、其の面影が身に添ひて斷るにきられぬ煩脳の、長き氣綱は結ばるゝ身こそ悲しけれ。彌陀頼む人は雨夜の星なれや、雲晴れぬども西へ行く、極樂は十萬億土と云ふなれど、又越しなんと聞く時は、爰を去ること遠からず』有明は唯其の儘の姿にて月の光は妙法の風に任かする身こそ安けれ。』

○春の調

新玉の年の初の壽や、昔し替らず吹き揚ぐる、笛と皷の音迄も、春の調べに聞えつゝ、玉簾ゆらぐ風立ちて『舞の袂も長閑なり』神の井垣の老松も、枝をつらね葉を重ねうべも太夫の影高く、祝を君にゆづり葉の常盤の色ぞ類ひなき、軒端に咲ける梅が枝も、和泉式部のゆかりとや、ゆかしく香る窓の内文見る袖にうつりくる、好文木の名に恥ず、又高砂住の江の相に相生の尉と姥、妹脊の契末長く、千代の例に引れつゝ、四方の海原浪なぎて、吹きも静けき時津風枝も鳴さぬ御代の春、千秋樂には民をなでゝ、萬歳樂には命を延ぶる樂も、年毎の今日汲替はす盃に、君と御國を祝ふなる松囃子こそ目出度けれ』

○名所盡

飛鳥川、淵は瀬となる世の中に『何歎くらんむつかしや』いざ立出でゝ、鹿兒島の名所〳〵を詠むれば、其の名も高き鶴丸の、峰の麓は御城山、松には鶴が巣をかけて、谷の小川に龜遊ぶ、岩を傳へて法の聲、歸るも同じ道行の、衆生濟度の彌陀の山、木々の梢も春來れば、色めき渡る華衣、重ねて袖を絞りつゝ、仰ぎし御代は久方の、光輝く御寺より、堰置く水の水上は、玉龍山と伏拜み、行けば程なく若宮の木陰涼しき日暮しの、今日は春日の里泊り、立や浦浪荒磯の、祇園參りに諏訪愛宕、稻荷山よりみ吉野の、しかも戀路の中絶えて、今は秋田の浦につき、大磯小磯三船山、龍ヶ水より遠近の、波間に華の櫻島、いとゞ烈しく吹く風に、猶告渡る鳥島、泊り定めぬ海士人の、磯屋に伏

せば沖小島や、沖に釣する漁火は、さながら夏の螢にて、我から身をや焦すらん。所誓をかけて八幡の、ほうべんせつは荒田なる、是ぞ法華經の正建寺、名にし負ひたる甲突の川瀨に波の棧橋を、しどろもどろと打渡り、袖をもしぼくと通ふ洲崎の、濱千鳥鳴くより外に友はなし、立や鹽屋の夕煙、松原山に棚引けば是ぞ古人の河內通ひの折柄に契なきや、かたみに袖を絞りつゝ末の松山浪こさじとは』連ね置れし言の葉も、今身の上に白雪の、處々は群消えて、鹿の子まだらの野元山、登れば頓て觀世音、下る宮路は久保田なる、神の惠の深ければ、森の一むら分け入りて、諏訪の社はありがたや、猶行先は萩原の、南無天神に參りつゝ、小路小路を詠むれば、昨日や今日まて月よ花よと言はれし人も、貪瞋癡の三毒に引かされて、無明の闇に打迷ふこそ哀れなり』

○老蘇の森

數ならぬ身にさへ年の積るかな『老は人を嫌はざりけりと』連らぬ置かれし言の葉が、今身の上に知られたり、されば此の世に生れ來て、生老病死の四の苦を逃るゝ人は更になし、彼の又四つの苦の中に、何れ差別はなけれども、中にも老苦が哀れなり、其の古へは我も又、容顏美麗の姿にて、月や花かと人にも見られ、假初の道行ふりに花を送られ、文玉章を取り替はし、笠のはづれの際よりも、人を見初むる目元迄、嗚呼恥かしやと思ひし事も、夢かと覺めて昔なり、去年より今年、昨日より今日と、衰ふる姿見る度に、くやしき事の增鏡、涙に曇る哀れさよ、然ればこそ、詩にも歌にも記さるゝ、白髮重來一夢の內、昨日まで乘つて遊びし、竹の駒、今日は早や、老の坂行く杖と

頼まん、又は古歌にも『變りゆく鏡の影を見る毎に老蘇の森の歎きをぞする』と、連ね置かれし言の葉が、今身の上に知られたり、只何事も人間の、此世にあるは假寢の夢か現の間なり

○群　鳥

まだ住み馴れぬ此の里の、人の心が村鳥、逢ふも逢はぬも浮きも辛きも、告や渡せば無き事故に、『余所に名の立つ因果なり』よし其れ迚も君樣に『逢ふて立つ名は是非もなし逢はで浮名の立つは』諸事無益只世の中に昨日見ても今日見ても、音信聞いても見も厭かぬ者は、春のめに梅と櫻に鶯の聲、夏は卯の花に山時鳥、空に一聲音信て暮れ行く秋の虫蟀す木の間の月に眠の聲、なんと聞いても面白や、冬は板屋に霰降る、音雁の聲四方の梢に、積もる白雪、尚夫れよりも見ても見も厭かぬものは、二人の親の面影と、自らすがたを寫す唐の鏡に戀しき人の面影は、日に幾度見ても見もあかぬ、其れに付きては皆人は、戀をしてこそつれなきを知れ、我身をつめて、人の浮身は知られたり、戀ひしやと我は偏に思へども、思はぬ君を思ふこりて、磯の鮑の片思ひ、我に心を置く君も、聞けは余所には打解けて、我には嫌疎そな振を召す、嗚呼恨みしや、篠田森の葛の葉の、恨みに置ける露程も、思はせて思はぬ君を思ふころ、是も因果の緣て候』

○狂　女

人間の世の形勢を心に留めて按ずるに、一度は榮え『又一度は衰ふる事もあり』然らば水の流れて又其水に歸らざるか如くなり』祇園精舍の鐘の聲。

諸行無常をあらはして、飛花落葉は目のあたり、只徒らに過ぐる身は夢の中なる夢なれや、其の古は我なから、美人の姿人にも勝れ、窈窕の花と飾られて、今を盛りの花桂、掛け、巻くも、添くも、我君の御身近く召し、仕れて、月見花見の御遊の供、錦の褥玉の翠簾、明け暮れ馴れし身なれども、人一度榮へ、花一と時に移れば、替る身の憂さを其の寵愛も枯れ〳〵に、今憔悴と衰へて、唯何事も妹脊の契り、淺衣の薄き緣にしと成り果てゝ、哀れ果敢なき我が身かな、人世、婦人の身となることなけれ、五十年過ぐるは夢の中、僅か百年か間の樂も苦も他人によると白樂天が書きたる『詩の心にも今身の上に知られたる、哀れ唯柴の庵と人なうして、獨り涙に伏し沈む、耿々たる殘んの燈火、幽かにして壁に添ひ、瀟湘たる夜の雨の窓打つ音迄も、恨を添ふる媒となる、餘り恨の數の重りて、唐土迄の思ひ草、哀れ貴きも賤しきも、物思ふ身は異らず、流は同じ水なれど、淵瀬と變るが如くなり』唯人間の因果を廻る小車の、我が惡業に引かれ來て、斯かる浮身をや焦すらん』

○薄が本

寢ては夢覺めては現、兎に角に、忘れもやらで如何せん、君の面影とは早古事なれど、馴れし昔の君ぞ戀しき、』何と包めど我が戀は、一本薄穗に出でゝ、結びも逢はぬ片糸のよる〳〵毎に枕の上は、涙の雨の晴るゝ間とては、更になし、松虫の聲立てゝ泣く蟀蟋、人こそ知らぬ片原の、薄が本を宿として、語らん葛の葉を恨み、露ならぬ花に心を置き染めて及ばぬ戀を、駿河なる、富士の高根に有らねども、胸に煙の絶え間なく、我が身の程が思ひの儘に成るものならば、飛行自在の小鳥の身となりて、君があたりを問はん、物と

は思へども思ひし事の奈良坂や、春日の里に獨り住む、いとゞ思ひは廣澤の、池の清水に身を浮べ、やる方もなき身こそつらけれ』

○武藏野

武藏野に、草は種々多けれど、摘み菜にすれば扨も少し、皆人は、若き時より唯『徒事に日を送り』才智藝能なき人は、寶の山に入りながら、空敷く歸るが如く也。偶々人間界に生れ來て眞如の玉を磨かずば、人と生れし甲斐もなし『只人よりは淺く思はれて、犬の歳老ゆるが如くにて、朽ち果つるこそ無念なれ』又いつの時にか磨くべき、頼まれぬ世にもある哉、月鼠戰草葉の露の身なれど、假令高位長者の身となりて、七珍萬寶滿ち〳〵て、榮華に誇る樂も、一夜の夢の如くなり』觀樂極まりて愛情多しと、古人の文にも配さるゝ、さればにや生々世々の樂も心の中の月や花』之れを樂む人もなし』會者定離盛者必滅の世の習ひ、春去り秋は蟬の聲、扨も果敢なきうき世かな、引き寄せて結へば草の庵にて、解くれば元の原野なり』少しきを足れりとも知れ、滿つれば月も程なく欠けて、行く十六夜の空や、人の身の上と知られたり』

○華の香

世の中に梅は匂へて櫻は花よ、『そうして後人は情の下に住む、』蜂の小松も獨り立つとは申せども、夜半の嵐は遁れがたなき、富士や淺間が嶽とても、霧や霞に埋もれて、三千世界に光を照らす日月さへも雲の閉しは、如何せん、況しても人間は五尺に足らぬ身を持つて、獨り立ちして世を渡らんと

思ふ人こそ果敢なけれ。君は臣下を頼み、臣下は君を頼み奉る、親子兄弟夫妻が中、又は朋友の交迚も互に頼み頼まれて、妹脊の中にて世を渡らんと、思ふ人ころ之れが誠の人なれや、我が關白に過ぐる身は、風の前なる燈火にてはなけれども、消ゆるに安き身を持つて、惡をたくむは地獄なり、善を願ぞ是が極樂、地水火風は娑婆の假物、釋迦も孔子も名のみ殘りて今はなし、達摩尊者も無一物と解かれしも、實に理りなりと知られたり、左もあらば古へ花に增したる美人の數を數ふれば、漢の李夫人、唐の楊貴妃、我が朝にても、二條の和泉式部に小野小町、常盤御前と云れし人も、盛りの程は名も高けれど、死すれば野邊の土となる、其の名も高尾の紅葉、野田小藤、吉野の櫻、北野の梅も、盛りの程は名も高けれど、散りての後は色香もなし』

○墨繪

心とは何を云ふらん不思議さよ『墨繪に書きし松風の音』況や世を諸法實相と聞く時は、峰の嵐も法聲邪正一如と見る時は迷ひも悟りもなかりけり、萬法一如と觀ずれば、谷の朽木も皆佛、さのみ不審はながりけり。三界に身は安からん、小車の我が惡業に引かれ來て、錦の紐を何時解くらん、四つの邪の一つの箱に疊まれて、いつも苦しき貧欲の、深き流れに身を沈め、浮ぶ甲斐なき我が身一つを如何せん、夫れ人間の習ひには、昨日の迷今日悟り、左れば如何に悟りし人とても、明日は迷ひし事もある、埋木に如何なる花や咲きぬらん、實になりてこそ思ひし人の上とて、さのみ云ふては如何せん、物の報ひは物事にある、會者定離、生死無常と唯にいひけん、言の葉な

れと、昨日今日とは思はざりけり、時に至りて歎き悲み、袖に露浮くばかりなり。生死烈しき風情にて、人には永く添はんもの、腹は立てども言葉は殘せ、千年此世にある身の如く、慳貪邪見は諸事無益、氣をあさ〳〵と心廣くも能く持つて、法の道には誰も深かれ、地獄極樂只一筋の、道の根を誰に尋ねん、佛ならでは知ろし召されぬ、佛とは何を岩間の苔衣、唯其の儘の姿にて、慈悲より外に如く心はなし、皆人が地獄極樂何國にあると思ふらん、胸の間にあると聞く、夫れ人間の如何に契りし親子兄弟、又は朋友夫妻の中迄も、此世計りの契なり、死して行く身の野邊迄では、娑婆の情に我も〳〵と供を致せと野邊より先きは、只獨り行く昨日迄では、人を送りて歸りしが今日は又人に送られ、人を返さん涙川、幾瀬渡るも淵なれば、御法の船こそ戀しけれ、之れに付けても老若男女に至る迄て、慈悲をも願へ慈悲萬行の功力にて、後の世までも涼しき風に悟り浮べば、即身成佛は得脫の緣となり、唯人間のなげきの中悅となる」

○王照君

とわず語り、誰聞けとてか打詫ぶる、身のうさを知れ山時鳥、軒の草忍ぶとすれど秋更けて、「齡はてたる虫と我れかな」別れには露の命も惜からず、夫れ一生は風前の燈火、悲み骨髓に透りて、形は憔悴衰へたり」只何事も妹脊の契り、淺衣の薄き緣にして成り果てゝ、哀れ果敢なき我が身かな、一度君に分れて又た逢ふ事もなし、隔て盡させし千山萬水の、雲終夜心に掛けて思へども、君に逢ふ夜の夢だにも見ず、今世の中に物思ふ、身は我等計りと思へども、昔を傳へ聞くときは王照君の古は、漢の帝の美人にて、御寵愛は

類ひなし、殿上にては並びなく、誠に雲の上人にて、さしも優々敷く御座せしに如何なる人の讒言にや、胡國と云へる遠國の、夷の在所に流され給ふぞ哀なり。痛はしや、王照君、今は、早住み慣れし花の都を涙と共に立ち出て丶、或時は船に召され、又或時は殊に險き山を越え、餘り我が身の上の悲さに、馬の上にて琵琶をも彈じ、古郷戀ひしき歌の曲、樣々朗詠し給へど、風情水雲皆悉腸を斷つとかや、帝も今は早聞召し、御愁歎の餘りにや、忝くも龍顏に、御涙を浮べさせ給ふ有難や、然れど又淪言汗の如くにて、再召し返さる丶御沙汰もなし、彼は唐、此れは、我が朝、又は胡國夷の朝、春は藥屋の夜の雨、乾坤萬里と隔つれど、物思ふ身は異らず、流水同じ水なれど淵瀬と變るが如くなり』唯何事も杜鵑、血に啼いて何ぞ腸を斷つとかや、暫し口を結て、三春を過ぐさんには由なかりける』

○赤壁

神無月、しぐるゝ時の雨雲の、いかに晴れてか山高く、月澄み登り水落ちて、『岩根あらはれ寒き江に』一葉とうけて酌酒の、たゆとふ影に三年經し、昨日ぞ移る其の秋の、胡竹の調べ其の節を、訴る如き木枯の、聞吹きすさむ大空に、むきたるならん芦田鶴の、近く飛渡り、更る夜に、鳴音をながし浦浪のうへ、いかにかも鶴の毛衣歸しけん、昔の夢の今も見えつゝ』

○蠟　蝋

つらく有爲轉變の世を觀ずれば、花も紅葉も一と盛り、『況や人も一と盛り』人の齡が花に似て、咲くは遲うて散り易く、散りゆく花は根に歸る、花は

散りても木さへあれば、又來る春は枝に戻りて香ひ來る、鳥は古巣に返ると云へど、夫れ人間は死して二度跡に歸らぬ死出の山、如何なる人の踏み初めて、行くも歸るも涙川、親の別れに子を連れず、又子の別れに親添はず、獨り生れて獨り行くこそ唯冥土の營みは疑ふ心あらずして、常に唱へし念佛も、是は淨土の實なり、然れば、にや、爰に、一つの假令ある、蟻蟻と云ふ虫は、如何なれば、己れが姿になき虫を之を我巣に集めつゝ、心を盡して祈りせば、我に似る事あるぞかし、我等如きも、迷の深き身も斯程に深く祈りなば、などか印のなからん、唯信の淨土らしんの彌陀と聞く時は、十萬億土の極樂も、爰を去る事遠からず、皆人は彼の理を知らずして、明け暮れ罪を作るぞ果敢なけれ、罪は來世の火の車、善は淨土の蓮なり、偶此世に人間衆生と生れ來て、後世前生を願はずば、いつの世にか浮ぶべき」

○梢の華

吉野山梢の花を見し日より、心は空と讀れしも、「實に理と知られたり、」昨日の華も今日は散る、今日ある迚も明日知れず、讎敵と誰も言けん言の葉なれど、誰か恨を殘すべき、武藏國の住人、篠黨の旗頭熊谷次郎直實は、無官太夫敦盛の前世後世を吊ふ、須摩の浦、一の谷にも立出て、諸方を觀ずる計りなり、雲井にまごふ浦浪に、羽打替し島千鳥、彼方の岡に吹笛の、音ぞ懇しき、敵味方術を爭ふ去年の春、如月六日の夜の宴、城の中なる笛竹の、今は草刈笛とかや、一村しげる松影に元より捨つる身の習ひぞと、爭て岩枕苔をかたしきて、寢られぬ儘に詠れば、有明の月影淸く、野原の白骨にうつらふは、砂を照らすに異ならず、夜更け人靜りて風肅々たり、魂魄結んで悵々たり

と言ひし言の葉の末迄も、思ひをこしつゝ物すごし、心も亂れてや、少しまどろむ草の中に、小笹の露を踏分て、顯れ出し敦盛の、玉の姿を引留め、有し半の物語り、聞に付ての法の道、唯深かれと爭て我れと願はぬ人はなし』

○増り草

住み馴れし、里は雲井の餘所にみて、其の音信も宇都の山邊の『現とも夢とも知らぬ旅衣、着初めし日より我袖の、かはく間とては更になし、岩盤の行末迄の物思ひ誰松虫と知らねども、たまさかに問ふべきものは、賤が身の心にあはぬ物語り、聞に思ひの増り草』

○潯陽江

紅葉うつろひあみがちる、秋のあはれのいと深き『潯陽江の夕まぐれ、』友の舟出を送り來て、別れをしむ盃の、數重なれどいとたけの、しらべも添はぬ淋しさに、本意なき事と思ひつゝ、影遠白き波の上の、月打まもる折しもあれ、忽ち聞ゆる琵琶の聲、思ひもかけぬ事なれば、互に心ときめきて、歸らんことも行くことも、忘れ果てつゝ其の聲を、尋ねて誰ぞと音なへば、打潜りて答なし、舟漕ぎ寄せて酒を添へ燈かゝげて又更に、宴の莚打開き、琵琶のあるじを招けども、頓には出で來ず、百千度呼立られてしぶ〳〵に、こなたの舟に移り來ぬ、琵琶を抱きてまばゆげに、面を掩ひ彈き初めし、其の撥音に、いひしらぬ深き情のこもりつゝ、ひき行くまゝにつね〳〵の、己が心のうれしさを、訴へ出る心地せり、人こそ知らぬ濱ゆふの、百重かさなる憂き思ひ、積る恨の數々を、四筋の糸にいはすらん、輕く打ち緩くひねり、はら

ひつかゝげつゝ、初めには、寛裳をかなて、後には六么を彈じけり、大絃は嘈々として村雨の如く、小絃は切々として、私語に似たり、切々と嘈々とこきまぜて、彈ば大珠小珠玉盤に落つ、間關たる鶯の聲、花陰に滑かに、幽咽たる泉流水早瀬を下る、水泉冷澁の趣凝りて絃を絶え、しばし聲なき其のほどは、そゝろに愛を催して、聲あるよりも中々に、風情を添へし折しもあれ、再び嘈々く撥の音、銀瓶碎て水迸り、軍起りて打物の、刀稜を削るに、髣髴たり、曲も今はとなりし時、撥を收めて四の緒を、只一聲に搔なせばさながら帛を裂く如し、東の船も西なるも、たゝ悄然と聞き惚れて、物言ふ人もあらばこそ、秋の浦風身に浸みて、水底白く澄渡る、月の影こそ更にけれ、衣をつくろひ居なほりて、語る言葉も口籠り、妾も本は都なる、蝦蟇の陵下の生れにて、十三歳の頃よりも、琵琶の工手と世に知られ、玉を飾れる宮の内、金を敷ける臺にも、召のぼせられ遊士の、かなたこなたの會にも招き寄せられ戯れ合ひ、さいめきかはしあやにしき、かつぎかへれば家も富み、身も榮えつゝ世の中は、斯くあるものと愚にも、思ひたのみて花の春、紅葉の秋と等閑に、日を經る程に同胞に、親族に離れ夕去き朝來りて顔花の、盛もいつか杉の門、馬も車も寄せ來ねば、世渡るたつき盡果てゝ、身を浮草の根をば絶え、水のまに〳〵誘れて、情も淺き商人を、夫とするだにはかなきを、其の夫遠く旅立し、此の浦舟に夜を守る、月明かに水さむみ、更け行くまゝにまどろめば、吾身の盛り夢に見て、いとゞ悲さ增さりぬと、語るを聞きて思はずも、ふときためいきつく〳〵と、琵琶を聞くだに悲しきを、此物語の哀れさよ、始めて逢へる此人と、身の際こそはかなけれども、我も同じく浮沈み、去年よりこゝに流離して、潯陽城のかたほとり、蘆と竹との生繁る、いぶせき中に家

居して、且夕に聞く物は高嶺の猿、杜鵑、樵夫の歌や總卷が、吹き鳴す笛の聲ばかり、却て胸を痛めつゝ、やまひいやす心地して、昔聞きつる糸竹の音なつかしく、思ひしに、今宵の君が琵琶の聲、天津乙女の音樂を、聞く心地していとうれし、否、むこと、なく、今、ひと、つ、彈きて聞かせよ予も亦、歌をつくりて贈らんと、いへば實にもと思ひけん、又も彈ずる撥音は、前の聲よりいそがしく、物凄ければ江州の、司馬はさらなり並居たる人も袖をぞしぼりける』

○城　山

夫れ達人は大觀す、抜山蓋世の雄あるも、『榮枯は夢か幻ろしか』大隅山の狩倉に、眞如の月の影清く、無念無想を感ずらむ、何をいかるかいかり猪の、俄に激する、數千騎、勇みに勇むはやり雄の、騎虎の勢ひ一徹に、留りがたきぞ是非もなき、唯身一つを打捨て、若殿原に報いなん、明治十年の秋の末、諸手の戰打敗れ、討つ討れつ頓て散る、霜の紅葉のくれないの、血汐に染めど願りみぬ、薩摩武夫のをたけびに、打散る玉は板屋うつ、霰たばしる如くにて、面をむけん方ぞなき、木魂に響くときの聲、百の雷ひと時に、落つるが如き有樣を、隆盛打見てほゝと笑み、あな勇ましの人々や、亥の年以來養ひし、腕の力もためしみて、心に殘る事もなし、いざ諸共に塵の世を、脱れ出でんは此時と、唯一言を名殘にて、一首の詩をぞ詠じける』

弧軍奮鬪衝圍還　一百里程壘壁間
吾劍既折吾馬斃　秋風埋骨故鄕山

桐野村田を初とし、宗徒の輩諸共に、煙と消えし大丈夫の、心のうちこそ勇ましゝ、官軍これを望見て、昨日迄は陸軍大將と、君の寵遇世の覺え、類ひな

かりし英雄も、今はあへなく岩崎の、山下露と消え果てゝ、移れば替る世の中の、無情を深く感じつゝ、無量の思ひ胸に満ち、唯悄然と腕をくみ、目と目を見合す計りなり、折しもあれや吹き下す、城山松の夕あらし、岩間に結ぶ谷水の、非情の色もなにとなく、悲鳴するかと聞なされ、戎服の袖を濡すらん」

○臺灣入

皇の御稜威は、四方にかゝやきて、清國遂に和議を乞ひ、臺灣島を献上し、合戰こゝに治まれる、『君が御代こそ目出度けれ』臺灣島の土賊共、隆車に向ふ蟷螂の斧を揮ふときこそしかば、征討の師をぞ遣さるゝ、こゝに近衛兵の精鋭を率ゐて、御渡海めされしは、陸軍中將大勳位北白川の宮とて金枝玉葉の御身なり、三貂角の御上陸、幕營ありし其の跡に、木を削りてぞ知さるゝ、炎熱燬くが如き日に、三貂大嶺の嶮岨をば馬にも召さず越え玉ひ、大雨しきりに降る時も、濡れにぞ濡れて進まるゝ、士卒之れに感激し、病兵さへも立ち上り、命を惜まず進軍す。處々の砦に籠りたる、賊兵共の討つ彈丸は、雨か霰か白雪の、降り注ぐが如くにて、砲煙暗く天を蔽ひ、百雷齊しく落つるに似たり、宮は矢石を冒しつゝ突貫せよと下知あれば、河村少將小島大佐を初めとし、勇みたちたる近衛兵、我れさきにと奮進し、賊の本營にと突て入る、賊兵之に氣を呑まれ、右往左往に逃げ散りて、降參するもの數知れず、大砲小銃の戰利品、山を築かん計にて、勝鬨どうと揚げれば、宮は此時悠々として基隆城へ入らせ給ふ。かくて六月十日には、臺北城を陷れ、七月新竹を占領し、翌る八月には彰北臺灣兩府を定め、十月の初つかた、臺南さして

を進まるゝ、天熱くして瘴癘多く、地險しくして糧道絶へ、千辛万苦の其の中に、宮は士卒と食を分ち、壹は汗馬に鞭をあげ、夜は荒野に露營して、戎衣の袖に月を宿し、只國の爲め君の爲め、平定の策をめぐらし給ふ、御痛はしや、悲しやな、竹の園生の御身にて、餘りに艱苦をつませられ、遂には御病にかゝらせ給ふ、日々に重らせ給ふより御供の人々打驚き、都へ返らせ給ふやう、切に御諫め申せども宮はいつかなきこしめさず、予れ官軍の將として賊徒平定を見ぬうちにたとひ臺灣の土となればとて、我のみ士卒を打捨てゝ、爭でか都にかへらんと、轎にめされて進ませらる、御臨終のその際に、賊徒平定きこしめされ宮は莞爾と打笑みて、萬歳と唯一聲、叫び玉ひしばかりにて、敢なく天に昇り玉ふ。傳へきく日本武の故事を、今目の前にみまゐらせ、國中の民も兵も慟哭せぬはなかりけり、去はさりながら昨日今日とは思はねども、老の不定に貴賤なし、但人は名こそ惜けれ、皆人も名を千載にに殘せかし」

○僧月照

花の都も秋はなほ、「夕べ淋しき風情なり、」名は流れたる清水や、落ち來る瀧の乙羽山、秋の葉色の溝ごとに、散るや紅葉のちり〳〵と、亂れ行く世の浪花江や、蘆のさはりは繁くとも、猶世のためにに身をつくし、盡さんとても筑紫潟、波影の岸の波ならぬ、操をいつか深緑り、色は變らぬ青柳の、驛路を越へて、香椎潟、たゝらの橋を打渡り、千代の松原千代かけて、萬代かけて君が代の、千歳の松によそへつゝ、神に歩みを箱崎の、社にかけし四つの文字、筆の主をよく問へば、延喜の帝畏くも、御手をば下しませりつゝ、爰もむかし

は石疊み、重ね重ねし白浪の、よせし昔を忘れじと、恨み浦半の片だすき、かけて慕くも憐れなり、沾衣塚の沾衣、吾身に着たる心地せり、やがて博多の寓居、こゝも涙風さわがしく、又行く方は薩摩潟、沖の小島にあらねども、心細くも都にて、誰かあはれと思ふらん、たよるは心筑紫潟、一人の外に打あけて、語ふ人も憂き枕、波路へだてゝ野間の關、せきとめられて又舟に、ゆられ〳〵て行く先は、黑の瀨戸てふ名もうしや、やがて鹿兒島かごの鳥、翼縮めて潛みしが、又木枯に驚きて、日向をさして船出せし、日は神無月望の夜の、傾く月と諸共に、照り輝きて曇りなき、身は大君の御爲とて、前に一人の薩摩人、如何なる緣にし先の世に、契りも深き船の沖き、底の藻屑となりぬるを乘合人も船人の櫂の雫の露程も、さりとは知らぬ白浪の、立ちさわげとも甲斐ぞなき、猶東雲のあけ鴉、なくより外はなかりけり、」

○雪のあけぼの

去るものゝ日々に疎きは世の慣ひ、三百余名の血盟も、『僅に殘る四十七士』或は商賈に身を變じ、或は門卒下郎となり、吉良の邸に忍び入り、虛實をさぐる其苦心、何に喩へん樣もなし、中にも首領の大石は、淫酒に其身を溺らして、廓通ひに日を暮し、或は新に家を建て、故主を思へる節操は、秋毫もなき有樣を、敵方これを搜り得て、今は恐るに足らずとて、其の警備をば解にけり。仕すましたりと良雄等は、既に夜討の議を決し、救火者輩の行裝にて、各四人を組み合せ、合圖を定め手を分ち、前後の二門に馳せ向ひ、梯子を以て塀を越へ、槌にて門扉を打破り、大喊一聲呼んで曰く、淺野の遺臣仇を報ずと、衆爭て亂れ入り、抵抗者をば拜み打ち、續て進むを幹竹割、直に進んで

寢屋に入り、怨敵義英を搜りしに、其厨傍の外營よりあやしきものを引き出し、その名を問へど答へざれば、是は不審き曲者と、槍とり延べて狹間光興、其の胴中を刺しければ、重隆太刀を打揮りて只一刀に首を討ち、門者を執へて責め問へは、果して敵義英なり、乃ち呼子の笛を吹き衆を集めて其首を、槍の穗先に貫きて、東雲告る鐘の聲、泉岳寺へと急ぎつゝ亡主の墳墓に祭りしは、後の世までも忠臣の鑑とこそは成りにけれ」

○兒島高德

元弘二年如月の、小雨しく〳〵笠置山、あやめも分かぬ夜の風に、指して行く手も楠の、「蔭だに見えぬ常闇に」荒れ渡りたる人面の心は鬼か蛇の如き、妖怪變化の賊共は、恐れ多くも天皇の、龍駕を西の隱岐の海、海路遙に移しけり、其の有樣は今も尙、史上に見るだに身の毛立つ、腸さへも寸々に、絕え入る計りうるむ目にも、睨む外ぞなし、其の時兒島高德は、衆を集めて言へる樣、仁をなす爲め身を殺し、義を見て爲すは勇なりと、勵ます言葉勵む武士、共々向ふ船阪の山の嶮岨は此れや是れ、天の與へし要害と、身を潛めつゝ堅唾のみ、我が帝を奪はんと、待つに甲斐なや鳳輦は、早や山陰に向ひぬと、聞くより早く杉阪の、樹の根岩の根踏み碎き、望めば又も鳳輦は、遙に過ぎて後影、僅に拜むばかりなり、今ぞ挫けし兵の、跡見送りて高德は、天を睨みて地に突し、姿をかへて身をやつし、風の晨も雨の夜も、厭はず御跡慕ひつゝ、善き折あらば赤心を、我が天皇に聞へ上げ、叡慮を安んじ奉らんと、氣の張り弓は撓まぬも、守り嚴しき板庇し、隙さへ洩らぬ龍姿に、さし足拔きし日本刀、櫻の老木かき削り、墨汁の墨の黑々と赤き心を書き下す、

天莫空勾踐　時非無范蠡

十字の文字は長城の、堅き固めや勤王の、記しも賊は明き盲群り見るも明鴉、阿房々々と笑ふのみ、我が天皇の龍顔も、最と麗しく暫の間愁の御眉開きけり、斯くの如くに高德が、虎の穴だに恐れなく、虎の子得んと思ひてし、勳は後の世々までも、輝き渡り曇りなき、明治の御代に愛國の、古きを尋ね新く、護りの神と崇めらる、讀む人々よ心せよ、彼れも人なり我も人、食ふは今もだに、日本に實る瑞穂なる、飲むも昔も今日も、清き日本の國の水、卑屈の臍洗ひ去り、國を枕に誠忠の、樂き夢や結ぶべき、』

○高德題櫻

麻を亂せる如き世に、四方の草木も已がじゝ、靡き背きて定めなく、『鏃を磨き矛を研ぎ、』兄弟鎬を削りつゝ、父子は亢を爭ひて、矢叫びの音鯨波の聲、絶える時とてあらざれば、さしもに重き萬乘の、大君さへも禁廷に、止まり玉ふ事ならず、隱岐の國へと行幸し給ふ、時しも兒島高德は、忠義一圖の心より、帝を奉じ嶮により、再び旗を擧げなんと、圖りし事のくひちがひ、遺感の心やる瀨なく、衣を變へて身を窶し、一度帝に面あたり、謁へて己が眞心を、告げ奉らんと思ひしも、其隙なくて夜の中に、難なく御館へ忍び入り、櫻を削り筆取りて、二句の唐詩書つけつ、赤き心を示しける、夜ほのぼのと明放れ、護衛の兵の之を見て、斯と帝に奏すれば、帝は之を讀み給ひ、不忠の輩多かるに、あはれいみじき勤王の、臣もあるかと、御心に喜び給ふぞ傷しき、されど今猶敷島の、倭心と山ざくら、花に思ひを掛卷も、尊き御國の龜鑑ぞと、譽むる其の名も香しく、朝日と共に輝かん』

○遠矢

新田足川相挑で、未だ戰ざる處に、本間孫四郎重氏、黄瓦毛なる馬の太く逞しきに紅下濃の鎧着て、只一騎和田の御崎の波打際に、『馬打寄せて沖なる船に向て』、大音聲を擧げ申しけるは、將軍筑紫より御上洛候へば、定て鞆、尾道の傾城共、多く召具せられ候はん、其爲に珍しき御着一つ推て進ぜ候はん暫く御待候へと云儘に、上差の流鏑矢を抜て、羽の少し廣がりけるを、鞍の前輪に當てかき直し、二所藤の弓の握太なるに取添へ、小松陰に馬を折寄せ、浪の上なる鶏の己が影にて魚を驚し飛びさがる程をぞ持ちたりける、敵は之を見て、射放したらんは希代の笑哉と、目を放す、御方は之を見て射當たらんば時に取りての名譽かなと、機を攻ず守りける、遥に高く飛び上りたる鶏、浪の上に落ちさがりて、二尺計なる魚の鰭を掴んで、沖の方へ飛び行きける所を、本間小松原の中より馬を駈け出し追ひ様に成て、懸鳥をぞ射たりける、態と生ながら射て落さんと、片羽がひを射切て、直中をば射ざりける、間鏑は鳴響て、大内介が舟の帆柱に立ち、鶏は魚を掴みながら、大友が舟の屋形の上へぞ落たりける、射手誰とは知らねども、敵の舟七十余艘には、舷を踏て立並び、御方の官軍五萬余騎は、汀に馬を扣へて、ア射たりと感ずる聲天地を響かして、靜り得ず、將軍是を見給ひて、敵我が弓の程を見せんと、此の鳥を射つるが、此方の船の中へ鳥の落ちたるは御方の吉事と覺ゆるなり、何樣射手の名字を聞かばやと仰せられければ、小早川七郎舟の舳に立出て、頻少なく見る所有ても、遊されつる者哉、さても御名字をは、何と申候やらん、承候はんやと問ひたりければ、本間弓杖にすがり

て、其の身人數ならぬ者にて候へば、名乘申すとも誰か御存知候べき、但弓箭を取ては、坂東八個國の兵の中には名を知たるものも御座候はん、此矢にて名字をば御覽候へと云て、三人張に十五束三伏ゆらゆらと引渡し、二引兩の旗立たる船を指して遠矢にぞ射たりける、其の矢六町余を越て、將軍の舟に並たる佐々木筑前守が船を箆中過ぎ通り、尾形に乘りたる兵の鎧の草摺に裏をかゝせてぞ立たりける、將軍此の矢を取寄せ見給ふに、相摸國の住人本間孫四郎重氏と、小刀の先にて書きたりける、諸人此矢を取傳へ見て穴懼し、如何なる不運の者が、此矢きに廻て死なんずらんと、兼て胸をぞ冷しける、本間孫四郎扇を揚げて沖の方を差招き、合戰の最中にて候へば、矢一ッも惜しく存候、其矢此方へ射返して、たび候へとぞ申ける、將軍是を聞き給ひて、味方に誰か此矢射返しつべき者有やと、高武藏守に尋ね給ひければ師直畏て、本間が射て候はんずる遠矢を、同じ所に射返し候はんずる者、坂東勢の中には有べしと存候はず、誠にてや候やらん、佐々木筑前守顯信こそ西國一の精兵にて候なれ、彼を召され、仰付られ候へかしと申ければ、實にもとて佐々木をぞ呼ばれける、顯信召に隨て將軍の御前に參りたり、將軍本間が矢を取り出して、此の矢元の矢所へ射返され候へと、仰せられければ、顯信畏て叶難き由をぞ再三辭し申ける、將軍強て仰せられける間、辨するに處ならずして己が船に立ち歸り、緋威の鎧に、鍬形打ちたる甲の緒をしめ、銀のつく付たる弓の反高なるを檣に當て、きり〳〵と推張り、船の舳先に立顯はれて、弓の弦くひしめたる有樣、誠に射つべくぞ見えたりける、かゝる處に如何なる推參の馬鹿者にてか有けん、讃岐勢の中より、此の矢一つ受けて弓勢の程御覽せよと、高らかに呼る聲して、鏑

をそ一つ射たりける、胸板に弦をや打たりけん元來小兵にやありけん、其の矢二町迄も射付す波の上にそ落ちたりける、本間が後に扣へたる軍兵五万余騎、同音に御射たりやと欺てしばし笑も止さりけり、此後は中々射てもよしなしとて、佐々木は遠矢を止てけり』

○物狂ひ

風に柳亂れ心や狂ふらん、胸のほのうが身を焦す『恨みしの浮世かな、』嗚呼、恨みしの此世かな、此の里の人の心が性なくて、谷の埋れ木朽ち〳〵にいひ立てられて君と我れ別れ〳〵に鳴海潟、身の終りこそうたてけり、思ひ出つれば今は早や、我が故郷に住家なし、いさゝらば思ひ立つ田の戀紅葉、夜半の嵐に誘れて、散り〳〵になる一葉の、船も焦れ出て、水の面に浮浪繁き身にしあれば、或時は君を恨み又或時は身を歎き、心狂氣になれ衣、身にあまりたる涙川、深き流れに身を沈め、浮ぶ甲斐なき我身一つを如何せん、時知りて花も涙や注ぐらん、鳥も別れを惜みてぞ鳴く、命の輕き事は只、飛火落葉の如くなり君を思ふ心は當に是れ高山其の一念は五百生けねん、萬業無量却に至る迄、て是れ又何の因果そや、何れ思ひは中々に、浮世にありしありがほの『娑婆の務めも益はなし、併し浮身を捨て果てんと思へど、流石又輪廻の浪の立つ間にも、其の面影が身に添ひて、片輪車の風情にて、遣る方もなき胸の中『今は路頭も憚らず、泣きつ笑ひつ安からぬは、物狂ひとや人のいふらん』

○鶯の夢

我が戀は鶯の夢かや見ては唯『語られ暮す因果なり、』思ひに余る折節は、門に立ち出月を詠め、花を見てこそ慰まん、其間なり共忘れつゝ、涙の雨の晴やせん、斯かる歎きの有樣を、何に譬へん片原の、逢ぬ契りも徒に、何しに深く願ふらん、馴れし昔に似たるも有るかな、古歌に有る露もげに、逢はてや果てん片原の、よる〳〵ごとの思ひのみ、すると連ね置かれし言の葉が、今身の上に知られたり、然れば聞くにも、津の國の、生田の川には戀故に、身を捨て果つる人もあり、又柏木衛門督は女三の宮を戀ひ奉り、遂に其戀遂げ給はねば、富士の高根と我胸は、煙比べにあこがれて、終に戀死召されたり猶も譬へば武藏の國の住人熊谷次郎直實は、無官の太夫敦盛を、詮方なくも手に懸けて、其れが一期の思ひとなり、鎧の袖を墨に染め、其名を蓮生法師と樣を替へ、新黑谷に引籠る、三と年の程は終夜、百萬遍を唱へける、之も敦盛最後の時、一言の言葉の替はし有る故に、武士の情もあるぞかし、假令ても譬へ方なき我戀は、あらはに燃る物ならば、何と駿河の富士の山、淺間嶽とは謂はれまじ、花も仇なる朝顏の、露の間なりとも逢ふ物ならば、夫て思ひの晴れてゆく』

○錦の御旗

天照す、日の影うつる眞名井の流、末清き瑞穗の國は『昔より武勇忠義の人多し』元弘年中の事とかよ、後醍醐天皇の三の皇子大塔宮と聞へしは、出家の身にてましませど、父の御ため國のため、義兵を揚げて逆臣を、征伐せんとの御企、早くも賊に漏れしかば、四方の備嚴しくて、比叡の奥にも南部にも、身を置き給ふ事難く、熊野を指して落ち玉ふ、股肱の人は誰々ぞ、赤松律

師光林坊、木寺の相摸三河坊、片岡八郎武藏坊、平賀三郎、矢田彦七、村上義光の九人にて、梯の衣に笈を負ひ、頭巾眉深に被りて、先達つくりて山伏の、熊野詣てに裝えたり、龍樓、鳳闕に、人となり、輕軒香車を出でまさぬ、雲の上人の御歩行の長途、如何にと御供の人々危く思ひしに、社々の御祈り、宿り々々の御勤め、露も怠り給はねば、勤修を積める山伏も、見咎むる者更になし、由良の湊を見渡せば沖漕く船の楫をたへ、浦の濱木綿幾重とも、知らぬ浪路に鳴千鳥、紀路の遠山渺々と、薄紫の藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上げの浦かけし、月に瑩ける玉津島」光を余所に打押み、長汀曲浦の旅の路心を碎く習ひなり、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す黄昏に、切目の王子に着き給ひ」鬱詞に袖を片敷きて、朝家の榮えを祈りまゝ、かくて十津川の戸野竹原便りて、暫し居玉へど、爰にも永く有りかねて、高野の方へと落ち給ふ、茲に妹加瀬庄司とて、賊に一味の士の、宮を支へて申す樣、此道通し申しなば、鎌倉よりぞ罪せられん、さはいへ宮に弓引くは、如何にも恐れ多ければ、錦の御旗賜るか、左なくば一人の御供を、止めて證據にせんといふ、股肱の臣を一人だに、いかでか殘し給ふべき、詮方なくも御旗を、彼に與へて虎の口、僅に遁れ給ひけり」斯かる處に村上彦四郎義光は、草鞋の緒や切にけん、遙に後れたりしかば、宮に追ひ付き申さんと、足疾く過ぐる折しもあれ、庄司に噬と行き逢へり、下人が持てる旗見れば、正しく錦の御旗なり、不忍議に思ひ問ぬれば、事しかゝと答ふるに、村上是を聞きも敢へず、くわつと怒りて打睨み、こはそも如何に何事ぞ、恭も畏くも、四海の主に御座します、天子の御子朝敵を、追伐あらん其爲めに、御門出の道なるに、汝等如き下郎輩、斯る振舞すべきかと、持ちたる旗を奪ひ取り、大の男

を搔擢み、四五丈計りなげけるは、獅子の荒れしに異らず』此の怪力に恐れけん妹加瀬庄司一言も、半句もなくしてすくみけり、義光御旗を肩に掛け、程もなく宮に追ひ付き、御前にひれ伏し事の由、具に申上しかば、宮は御喜び古の、北宮勝か勇氣にもたち勝れりと愛てましぬ、勇みならず義光は、吉野の奥の戰ひに、宮に代りて討死し、御旗にうちたる日月と、光爭ふ忠臣と、義士とたゝへて萬代も、君に仕ふる人臣の、鑑みとこそは仰がるれ、鑑とこそは仰がるれ。』

○小　督

頃しも秋の半の空、詠め勝なる御袖の、涙の露を拂はせ給ひ、宿直に待らふ『彈生大弼仲國を召され』如何に仲國小督の行衛を知りたるか、內裏を逃れ出でしより、嵯峨のわたりに聊の、知るべ便りて在りと聞く、汝如何にもして尋ね出で此文傳つたへよとの仰せなり、仲國つく〳〵思ふやう、嵯峨のわたりと計りにて、主の名をだに知らずして、尋ねん樣はなけれ共、小督殿は、世にも知れたる琴の上手におはすれば、今宵最中の月影に、君の御上御ぼし出てゝ、一曲をだにしらべ給はぬ事はよもやあらじ、兎にも角にも尋ね出て參らせて、敵慮を休め奉らんと、心に思ひ定めつゝ、かしこまりぬときこへあげ、やがて御前を罷り出て、寮の御馬に打乘りて隈なき月に鞭をあげ干をしか鳴く此の山里と詠しけん嵯峨野の奥にわけ入れば、きらめき渡る白露に、尾花が袖も打しめり、鳴きかはしたる虫の音に、浮世の善惡も思はれて、獨り心をいためつゝ、家有るごとに立寄りて問へど知るものの更になし、如何はせんと駒を立て、茫然としてありつるが、若し實林寺にや

おはすると龜山近く至りしに、しつかき遥に聞えたり『翠の嵐か松風か尋ねる君の琴の音か、とめつゝ行けば一村の、松のかげなるかた折戸内に聞ゆるつま音を、手綱ゆるめてつくゝと、聞けば誠や月花の、御遊のむしろに待りて、笛の役つかふまつりし時、聞き覺つる調にて、殊更曲は想夫戀、扨てはまぎれもあらじとて、腰より横笛ぬき出てゝ、少し計り吹きならし、やがて駒より飛びおりて、門をほとゝとたゝき、是は内裏より仲國御使に參りたり、明けさせ給へとおとなふに、琴彈さし靜まりかへつて音もなし、』やゝありていたひけしたる小女房、門をほそめ明け、顔ばかりさし出して、あやしの賤が伏せ庵に、内裏より御使など給はるべきにあらず、門違ひにや侍らんと、云ふに仲國なまじひに、いらへしては門さゝれんと思ひければ、是非なく押し明け内に入り、つまどのえんに進みより、何とてかゝる處には御渡り侍らふぞ、君には明け暮れおぼし沈ませ給ひ、つゝ〳〵供御も聞召さず、打とけ御寐もならせ給はず、ほと〳〵御命も覺束なふこそ見え給へり、かく申さばうはのそらにやおはすらんと、御消息を參らすれば、あらなつかしの雲井やと、御文顔にあて給ひ暫し言葉も涙の雨に、晴れたる月も曇るらん、仲國もそゞろにせきくる涙をおさへ、兎角慰め參らせつゝ、表の衣絞る計りになりにけり、やゝありて御かへりこと引むすび、女房の裝束一かさね給はりければ、肩にかけ君にもさこそ待ちあびておはすらめ、重ねて御迎には參るべし、待たせ給へといひすてゝ、駒を早めて立歸り、ありし次第を殘りなく、奏する程にほの〳〵と秋の長夜もあけにけり、『秋の長夜もあけにけり、』

○那須與市

四國八島の荒磯の、濱て源氏平家の戰ひに、源氏方弓矢の譽れ『今世迄も記さるゝ』左れば平家方より沖なる舟に、年頃十八九造りと打ち見えて、女官とも覺えしが、花やかなる裝にて、船の表に立ち上り、扇を的に立てゝ、陸に向ひてぞ招かるゝ、源氏の大將義經公、御覽召され、數多の人を御側に召され、如何に方々あれを見よ、沖なる船に扇を的に建てけるに、兎にも角にも射らては、叶ふまじと宣へど、沖に立てたる的なれば、誰こそ御請申す人、更になし、爰に下野の住人那須の與市宗高は、名を得たる弓取なれば、義經公宗高を御前に召され、如何に與市、あの扇を射れよと宣へば、與市承り、再三辭退申上けれど、義經公是非に射れよとの嚴命なりしかば、與市今は辭す

るに辭なく、直に御請いたして御前を下りける、宗高本年十九歳、常に勝れて華かに、緋威の鎧着て、鍬形打ちたる五枚甲の緒を締め、白檀磨の脛當に、兵庫鎖の針を貫き、年は五歳の眞黑毛の名馬、梨地の鞍に、紫手綱、重藤の弓を持て、廿四差したる切負の征矢を負ひ、其身輕げに乘りたる形勢は、さも勇々しくぞ見へにける、頓て浪打つ際に乘り出し、沖なる船を見渡せば、間二町計りと打見えて、名殘の浪は音高く、風は競ふて浪は小車の如くなり、的は定らず射るに射られぬ次第かな、されど又武士の御請致せし上からは、兎にも角にも射らては叶ふまじと、直に小松原に駈け上り、駒より飛び下りて那須八幡に伏し拜み、某が七十五迄の命ならば、六十五迄、六十五迄の命なら五十五迄、五十五迄の命ならば四十五迄に身命を縮め、沖なる的を射らせ給へと、深く所願を申つゝ、那須八幡聞召され、二つともなき命に

引かへて沖なる的を射る心中のふびんさよ、拾二方を的一筋に打守れよとの御宣托有りければ、宗高は駒引き寄せ打乘りて海中へ颯と駈け入り、浮きつ沈みつ一町計りは乘り出しが、駒逸物とは申せども、逆巻く波にせかれつゝ泳ぎ乘てぞ見へにける、矢ごろは少し遠けれど弓と矢打変ひ、矢聲を掛けて放ちける、其矢は誤たず扇の金目本よりぶつと射きり、扇は空へ舞上り又海中にさつと落ちければ、平家舷を叩き陸には源氏、鏑を駢べ、箙を叩ひて感じける、されば平家は敗軍と極まりて、西國指して落ちにけり、宗高も高名數多あれど、個程の高名は始めにて、其の名を末代に輝し源氏の御代こそ目出度けれ」

○忠　度

吹をろす、比叡の山風烈しくも、木曾の義仲早既に、都に入ると聞えしが」急ぎ御幸を促して、西の方へぞ落ちにける薩摩守忠度は、跡見かへりて家々の、燒け失せぬるを打眺め故郷を燒野の原にかへり見て、末も煙の浪路をぞ行く、と嘆つゝ駒の頭を引歸し、僅に六騎相具して五條の三位俊成の、門の戸を細目に押開き今は憚る身なれども運盡きたれば一門と、身を西海に沈めんは、鏡にかけて見る如し、されば世の中靜まりて、勅撰のあらん其時に、腰折れなれど一首を御惠みあらば、假令此身は藻鹽草、八重の鹽路に沈むとも、嬉しからんと卷物を、箙の中より取り出し、俊成卿に渡されけり」

前途程遠馳思鳳山暮雲後會無期霑纓鴻臚曉涙

と駒の踏みをけはいつゝ、南を指して行かれける、俊成卿は之を見送り、あらいたわしや此人は、同し道踏む友なるに、今は此世の別れとて、涙を袖に

絞りけり』さゝ波や志賀の都はあれにしを昔なからの山櫻花と千載集に故郷の花と題して讀人知らずと載せたれど言葉の花は後の世にこそ匂ひけれ』

○川中島

天文二十三年秋の半ばの頃かとよ、上杉謙信は八千余騎を從へて『川中島に打て出づ』我此度の戰は、武田信玄を追ひめて、親しく雌雄を決せむと、渦巻き返す犀川を、渡りて陣をぞ取にける、信玄は是れを聞くより早く二萬余騎にて打迎ひ、砦を固めて戰はず、謙信は氣を焦燥す、村上義清に言ひ含め、月影暗き山々の、草葉の露を分けさせて、彼方此方に兵を伏せ、椎夫に擬せし兵を、出して甲斐の兵營に近かしむれば、甲斐の兵計略とは露知らぬ、朝霧の間に追まくる、待設けたる伏兵は、時こそ來れと勝鯨波をドット揚げつゝ引包み、袋に物を取る如く一騎も殘さず打取たり、信玄怒て軍勢を雲霞の如くに繰出せば、謙信も備を立てゝ打向ふ、龍躍て雲を起し、虎嘯て風を呼ぶ、勢破竹の如くにて入り亂れ入り亂れ、攻め戰ふ有樣は、颶風砂を卷き、百雷岩を拔くに異ならず、越後の勢退けば、甲斐の軍之を追ひ、甲斐の軍退けば、越後の勢之を追ふ、兵を合する事十七度何れを勝としらず、弓引くかと見へし信玄が、一手の勢の旗を伏せ川を渡りて葭葦の隙を私かに忍ばせて、勇みたる謙信が旗本近く進み寄り、面もふらず斬て入る、麾下の軍勢は思はぬ兵に敗られて、走る跡より甲斐の兵鯨波を作りて追かくる、宇佐美定行是を見て猛虎の如く憤り、憤馬を驅て大音に、我手の勢に下知をなし、敵の横合より、無二無三に突入て、淵瀬もいはせず追落す、信玄度を

失ひ流れを亂して走る所を、謙信唯一騎赤の栗色の逞しきに鞭を當て壓子何所まで逃くるぞと』、日ひも果さず切付くる信玄刀を拔くに暇なく、軍配扇にて受けたれど扇は二つに折られたり』

降ると見て笠取る暇もなかりけり川中島の夕立の雨

と歌ひし如く、二の大刀は早肩先に切り込みぬ、あつと云ふ間に信玄が命は岩に碎かるゝ泡と消なむ危さを、救はんとして軍兵が、心は矢竹に勇めども、水駛くして近寄れず、隊將原大隅鎗をのばして謙信を突きはしたれどあだつきし、斯くてはならじと鎗を擧げ、唯一と打ちにと打たりしに、馬に當りて馬逸す、謙信馬を鎭めんと手綱かい繰る、其の際に信玄は、虎口を逃れ去りにけり、』

鞭聲肅々夜過河。曉見千兵擁大牙。遺恨十年磨一劍。流星光底逸長蛇

斯く信玄を打漏したる謙信が、心の中や如何ならん思ひやるだに哀れなり』信玄は肩の痛手に耐へ兼ねて、其の夜の中に軍勢を、まとめて出る月影に道を求めてはる〳〵と、我古郷に歸りけり、我が古郷に歸りけり』

○虎狩り

文祿元年壬辰の年、太閤秀吉公我朝の諸將を催し『朝鮮國を征し給ふ』、之れにより島津修理太夫義久の舍弟兵庫の頭義弘、子息又八郎忠恒、父子相共に薩隅日三州の兵數萬を引率し、八重の汐路を渡り、彼の地に年を經て、寒暑風雨を厭はず、常蛇鶴翼の陣を展べて、折々の軍忠萬大の功名、異國本朝に露見せり、加之同三年の冬秀吉公虎の肉藥方に用あるにより、虎狩をして肉を捧くべきのよし、木下大膳の太夫淺野彈正少弼の奉書、翌年正月

到來す、時しも積雪山を埋み、薙兎蒭蕘の通ひすら心に任せず、況んや虎狩に於てをや、如月過雪も村消えて、漸く薄氷を踏み、彌生八日に唐島の港より纜を解き、赤國の昌原といへる所に船を寄せて、史編がトに及ばされば、板つきを休めず、同九日に狩場に打出られける形勢は、陷穽の固よりも猶增さりて圍み、然はあれど深山遠く住むものなれば、容易く狩り出すことなし、翌十日には尙深く分け入り、嶮岨を避けず、巖を起し、岡谷をとよまし、數千人の烈卒の聲天に響て狩りけるに、俄に雨降り來りて前後を辨へず、徘徊する所に猛虎一つ走り出て、此處彼處にかけ廻り、既に圍みを出て行くを、島津守右工門尉彰反の郎黨、安田次郎兵衛追ひかくれば、立戻り喰はんとす、其時虎の口に刀を貫き、目のあたりに切り殺せば、馮婦が肱をかいげて向ひしにも異らず、暫く有りて又二つ出て、人皆之を見て義弘忠恒の立つ所、近く走り來らんかと肝を消す、斯かりける所に忠恒は老父義弘の恙あらんことを怪しみ揚香が虎に跨かし心地して、暴虎馮河の死を懼れ給はず、馳せ向はんとの氣色見えしに、忠恒の舍人上野權右衛門と云へる若者走り懸りて切らんとす、則ち彼を嚙み殺し牙にかけ五間計か程になげ落し、彌々威を振ひ、山を靠て嚙くを、帖佐六七捕へくれんと勇みかゝれば、忽向ひ逢ふ頭を三刀切り、直に喰ひ掛かり股に嚙み付き、危く見ゆるを、福永助十郎尾を取りて松の下枝に引掛くれば、時を移さず永野助七郎、續き合ひ、終に切り殺しぬ、誠に彼の人々の働きは子路が勇をも欺くべし、其の内六七は股痛にて程なく死す、今一つの圍は虎の破り出けり、扨獲物の虎二つ日本に渡されければ、殿下に於て貴賤の褒美斜ならず、殊更感激の御朱印賜はり、今に櫃に藏めて子孫に傳ふ、文書の中にこれあり、其事蹟丹

精の手に附し、寫し出して名を留む、後の人口圖書に對して、英氣を興さゝる者はあらし』

○本能寺

麻と亂るゝ戰國の人とし言へば誰れもかな、馬を養ひ兵を練り『糧を收め て劒を磨す、頃は天正十年夏五月、德川封せられ、安土城下に入しかば、織田 右大將信長は、いと鄭重に迎へんと、直ちに惟任光秀に、饗應の役をぞ命ぜ らる、御請致せし光秀は亂れたる世に心得し、都の手振見せばやと、さしも 目出度勤めしを、小人輩の言により、善美過分の評をうけ、疑心暗鬼は信長 の胸に宿りし時も時、羽柴秀吉中國より、援けの兵を請ひしかば、嚴命忽ち 光秀の、首の上にぞかゝりける、光秀私かに思ふ樣、人もあらんに此我れに、

羽柴が命に從へとは、あな情けなの我君やと、齒噛をなして恨みしは、君に 仕ふる人臣の、よもあるまじき事なれど、又信長を見るときは、右大將とも 仰がらるゝ、身に疎暴の振舞いと多く、或時は蘭丸をして、光秀の首に鐵扇 を、加へさせ又或時は、好まぬ酒をこと更に、我意を透してすゝめしめ、志賀 のみやこの領地さへ、三年のうちに事もなく、奪ひ取られむ說を聞き、今又 產を傾けて、新に來りし家康に、心盡のもてなしも、琵琶湖の水の泡と消え、 抑へし焰らむら〳〵と、もゆる思ひの光秀が、拳を握りて立ち上り、動く眼 の間より、由々敷大事のほの見えしを、露ほど知らぬ信長は、諸將を安土に 止め置き、親ら近臣、百余人ひき從ひて、京都なる、本能寺にぞ入にける、時こ そ來れと光秀は、田鶴もあそはぬ龜山に、從子光春等を召しよせて、積るう らみの數々を、數ふる中に光秀が、眼は血汐ほとばしり、逆立髮は冠を、突く

勢を見てとりし、光春ともか百千たひ、諫むる言葉も聞かばこそ、推て謀反に加盟させ、暴戾無道の弑逆をば企てしこそあさましけれ』かくて士卒を打揃へ、中國勢を援はんと、僞り向ふ大江山、心の駒も烏羽玉の、暗路をいそぐばかりにて、さしも忠義の光秀が、追々年も老の坂、如何なる道や迷ひけむ、無念至極の胸の中、亂れて濁る桂川、渡らむ駒の足なみは、東を指してぞ進みける』

本能寺滿深幾尺　我就大事在今夕　莫粽在手併莫喰
四詹梅雨天如墨　老坂西去備中道　揚鞭東指天尙早
我敵正在本能寺　敵在備中汝能備

爰に始めて軍勢は、漸くふた心とさとりしが、捨る命は一つぞと、時しも六月二日の朝まだき、露の身輕き軍兵が、本能寺を取圍み、鬨を作りてそ攻め入りける、此物音に信長は、寢覺の耳をそばだつれば、紛ふかたなき人馬の聲、館間近く聞ゆるに、枕を蹴て立ちあがり、疾く見屆けよとありければ、森蘭丸畏り表の方に走り出、見越の松に片手をかけ、右手をかざして見てあれば、雲か霞か白旗に、染たる桔梗の紋所、見るより蘭丸引かへし、光秀謀反と答ふるに、嚇と怒りて信長は、者共覺悟と呼はりて、引矢ちつとり打向ひ、寄せ來る敵を物ともせず、またゝくひまに數十騎を、矢繼早に射て落し勢ひ銳く拒きしも、只一筋と信長が、賴む弓弦ふつときれ、得たりとつき入る豪敵をすかさず、弓もて打て伏せ、兎角するうち信長も、左手の腕に痛手を負ひ、蘭丸代て拒ぐうち、宿直のものもことごとく、命を的に戰へど、衆寡敵せず信長は、最早是迄とや思ひけむ、自らやかたに火を放ち、煙の中に飛入て、刃に伏してそ果にける、嗚呼、豪邁の信長か、空をも蔽はん大鵬、圖南の翼

中空に燕雀のつめになやまされ、終世の望みたえたるは、獅子身中の虫に倒れたる、そしりを受て人皆の、口に殘るもいたましき』續て蘭丸を初めとし防丸、力丸の小姓ども、いまだ若木の櫻花、嵐の山の朝風に、いとも床しき香を、止めて散やちり〳〵あとやさき、百有餘人ももろともに、哀れ本能寺の朝の煙りと消えにける、』

研き得たる、心ゆるすな增鏡、おもはぬちりの、かゝる世の中、

つら〳〵、古今を按ずるに、人に君たる王侯の、心すべきは德にこそ、』心すべきは德にこそ』

○千早振

千早振る神の御代より吳竹の世々にも絕えずあまびこの、音羽の山の春霞、思ひ亂れて五月雨の、空もとゞろに小夜更て、山郭公鳴くごとに『誰もねさめて唐錦』龍田の山の紅葉ばを、見てのみ忍ぶ神無月、しぐれ〳〵て冬の夜の、庭もはだれに降る雪の、猶消歸り年毎に、持につけつゝ哀てふ、言をいひつゝ君をのみ、千代にと祝ふ世の人の、思ひ駿河の富士の根の、燃る思ひもあかずして、別るゝ涙ふぢ衣、たれる心もやち草の、言のはごとに皇王の、おほせかしこみまき〳〵の、中につくすと伊勢の海の、浦の鹽がひ拾ひ集めとれり、とすれど、玉の緒の、みじかき心思ひあへず、猶新玉の年を經て、大宮にのみ久方の、壹よる分かずつかふとてかへり見もせぬ我が宿の、忍草たふる板間あらみ降る、春雨のもりやしぬらむ』

○王政復古

王政復古の當時を、思へば過ぎし慶應の、三年の冬の十二月、九日の日の初めにて、『都の空に立歸る、』春の光もかきくらす、雪消の雲のたちまちに、世は苅菰と亂れつゝ、山郭公鳴ころの、五月やみにはあらねども、あやめも分かぬ墨染の、鞍馬の山の山びこに、響き動よめる大砲の、音はさながら百雷の、一時に落る心地して、驚き騷ぎ泣き叫び、老若男女逃げまよふ、都の中はさながらに、鼎の沸くに異らず、山ゆかば草むすかばね、海行かばみづく屍と言建てゝ、身をかためたるつはものゝ、鎧の袖に輝くや、星の位も三台の、影薄れゆくさしぐしの、曉やみに打出す、火矢の煙に吳竹の、ふしみも見へず白鳥の、鳥羽も別れぬ折しもあれ、空に輝く月と日の錦の御旗九重の、大內山の山風に、飜しつゝ公家御門、押し開かせて出給ふ、『大將軍の仁和寺の宮の、威風にあたりては、靡かぬ草木もあらじとて、ふりかへり見る大丈夫が、勇氣も常に百倍し、軍よばひも鳴神の、轟き渡る修羅の道、斬りつ斬られつ、阿毘叫喚宮に從ふ參謀の、其の面々は東久世、烏丸を初とし、矢守、高崎、中沼等、四條五條は旗奉行、前後左右を打守り、勤王諸藩の鋭兵が、火花を散らす一戰は、國の安危とかたづ飲む、帷幕の中に置く霜の紅葉のくれないの、丹き心をとり〳〵に、倒れ重なる屍は、敵か味方か彼は誰れ時、『踏みしだき、行く戰場の、習ひ常なき露を、身と、かざす劍の柄の、間も、君を忘れぬ武士の、』道のはてこそ憐れなれ、』天地も動く震動に、焰逆卷き淀の城、見る〳〵灰となりはてゝ、空を掩ひし黑煙、跡かたもなく消へうせて、『朝日の光あらはれぬ、七百年の昔より、武門に落ちし政權を、治め給ひて櫪原の、聖の御代の古に、復し給ひし大御代の長閑き春によろこびの、眉も開けて打ちつどひ、昔語りと過きし世を、談りつゝ酌む盞に、老いたる影もかつ見ゆる、此の宴こそ

目出度けれ、此の宴こそ目出度けれ』

○石童丸

筑紫大守、名も高き、加藤左工門重氏は、『無情を感じ世を捨てゝ』諸國修行に出で給ふ、殘されたりし妻や子は、思ひ待つこと十余年、父上高野にありと聞き石童丸は母上と、管の小笠を傾けて、旅のつかれもいとひなく、漸く高野の禿宿、明日は逢はんと喜べど、女人禁制の山なれば、母を麓に殘し置き、是非なく石童只獨り、杖をたよりにたとたとゝ、心細道踏分けて、峯の藥師や瀧不動、手を合せつゝ伏拜み其の夜は其所に假寢して、笠の屏風に腕枕、諸行無情と告げ渡る、鐘の音いとゞ身にしみて『三日二夜も早や過ぎて、麓の母を案すれば、後ろに引かるゝ心地して、無名の橋に差かゝる、左に珠數を右に花、高明眞言唱へつゝ、苅萱道心降り坂、見上げ見下す顏と顏、石童丸の振袖と、高祖の袖ともつれ合ふ、其時袖に取すがり、若しこの御山にて、今道心敎へて給へと乞ふ姿、見れば一人の幼兒が、腰に差したる脇差も、見覺へのある顏せに、扨ては不思議と思へども、さはらぬ體にもてなして石童丸に申す樣、尋ぬる人の名を書きて、札塔に立つれば逢ふ事も、あらんと聞て泣き沈む、石童丸を苅萱は、憐み給ひ手を取りて、己が住處に連れ歸り、國は何處名は何と、問はせ給へば涙ぐみ、國は筑前松浦の、加藤左工門重氏が、忘れ形見の石童と、聞て苅萱胸迫り、せき來る涙留め敢へず、石童其れと悟りしが、若し父上に御在さすや、名乘り給へと云ひければ、あら懷かしの我子よと、言はんとしては、名乘り兼ね、其の苅萱は去年の秋、空敷なりぬと宣へば、又も石童わつと泣き、せめて墓塔を敎へてと、請ひければ、苅萱是非な

く墓所に連れ行き指して、これぞ父の墓なると、聞て石童泣き倒れ、前後も知らず歎く樣、後ろに佇む苅萱は、胸も張裂く計りなり、暫くありて漸々と石童丸を抱き起し、涙は佛の爲めならず、一度此御山を下りて、母上にこの事云ひて回向せよと、諭されければ、石童泣く〳〵山を降りつゝ、母に告げんと來て見れば、あわれなるかな母上は、石童丸を待ち兼ねて、麓の野邊に枯れ殘る、草葉の露と消え玉ふ嗚呼父上には生き別れ、又母上には死別れ、天にも地にも便なく、後に便るは姉獨り、逢ふて此由語らんと、歸りて見れば、姉も又、此の世を去りて、跡もなし、最早尋ねる人もなし』、高野に登りし其時に憐み給ひし御僧より、外に便りは泣くばかり、亦も高野に苅萱の、庵尋ねて御弟子にと、乞はれて苅萱是非もなく、共に連れ立ち國々を、修業なしつゝ信濃なる、國に住居を定めつゝ、子弟と名乘る計りにて、親子地藏と唱へよと、遺言し玉ふ哀れさよ、信濃に名高き善光寺、石童寺の本尊に』親子地藏の御在すなり』、嗚呼親子の緣は斯く迄に、切りても切れぬものなりと、今は昔の物語り、南無や大悲の地藏尊』

○俊基朝臣東下り

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻がり、紅葉の錦衣て歸る、嵐の山の秋の暮れ、一夜を明す程たにも、旅寢となれば物うきに、恩愛の契淺からぬ『我が古郷の、妻子をば、』行方も知らず思ひ置き』年久しくも住みなれし、九重の都をば、今を限りに顧り見て、おもはぬ旅に出で玉ふ、心の内ぞ哀れなる』、愛ぶば留めぬ相坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、遙ならぬ海にこがれ行く、身を浮舟の浮き沈み、駒もとゝろと踏なと

す、勢多の長橋打渡り、往來人に近江路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀れなり、時雨もいたく森山の、木下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分る道を過き行けば、鏡の山はありても、涙にくもりて見へはかぬ、物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、古郷を雲や隔つらん』番馬醒ヶ井柏原、不破の關屋は荒れ果て、猶ある物は秋の雨の、いろ我が身の尾張なる、』熱田の八劔伏拜み、墟于に今や鳴海潟、傾く月に道見へて、明けぬ暮れぬと、行く路の、末はいつくと遠江、濱名の橋の夕塩に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰があはれと夕暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に着き玉しに、

東路の、はにふの小屋の、いぶせきに、故郷いかに、戀しかるらん、

と長者の女が詠みたりし、其の古の哀れまで、思ひ殘さぬ涙なり、旅館の燈火、幽かにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶きて、天龍川を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の空を望みても、昔西行法師か命なりけりと、詠じつゝ二度越へし跡迄も、浦山しくぞ思はれける』、隙行駒の足はやみ、日已に亭午に昇れば、餉參らする程とて、輿を庭前に下し、轅をたいて警固の武士、近つけ宿の名を問ひ玉へば、菊川とまうすなりと、答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし、咎に依りて、光親郷關東へ、召し下されしか、此の宿にて誅せられしとき、

昔南陽縣菊水汲下流而延齡今東海道菊川宿于西岸而終命

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我身の上になり、哀れやいとゞ增りけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にそ書かれける』、

古も、かゝるためしを、菊川の、同じ流れに、身をや沈めん、

大井河を過ぎ玉へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭鷁首の舟に乘り、詩歌管絃の、宴に侍りし事も、今は二度見ぬ世の夢と、成ぬと思ひつゝけ玉ふ、『島田藤枝に懸りて、岡邊の眞くづ裏枯れて、物かなしき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、』蔦楓いと茂りて道もなし、昔業平の中將の住所を、求むとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけりと、詠みたりしもかくやと、思ひ知られたり、清見潟を過ぎ玉へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催ほされ、向ひはいつこ三保が崎、興津蒲原打過ぎて、富士の高峰を見玉へば、雪の中より立つ煙り、上なき思ひに比べつゝ、明る霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、鹽干や淺き船うきて、おりたづ田子の自からも、浮世を遶る車かへし、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯小磯見おろして、』袖にも波は小ゆるぎの、急ぐとしもはなけれ共、日數つもれば、七月廿六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ、

○菅　公

靈ちはふ神代はるけき昔に、穗日の命と申しゝは、日の大神の御言もち、此葦原の國見形、『神のさやぎを撫て鎭め』、天津日嗣の御ために、高き功をあらはせり、又玉垣の宮の御代、野見のすくねと云ひけるは、殉死の風を止めむと、おもほしめしし天皇の、大神慮を輔けつゝ、うべなりけりな、その裔の菅原氏は代々を經て學者も多く、功臣も少なからざる其の中に、道眞公と聞えしは、學識博く才深く、忠良無比の人なるを、かしこき宇多の天皇は、深くたのみにおほしめし、藤氏の權をおさへむと、右大臣まで擧給ひ、なほ進む

べき、身の榮え、あはれ花には嵐あり、月には雲のならひにて、延喜の御代の明らけき、光もおぼふ中空の、雨のぬれ衣ほすよりも、泣きて訴へし言の葉に、法皇これをとゞめんと、出てます道もさへぎられ、遂に大宰の權の帥、御子たち、二十余人もちり〳〵に、流されたもふぞいたはしき、をりしも春の梅の花、それも露にやしめりけん、今はとこれを御覽して、

東風ふかばにほひおこせよ梅の花あるしなしとて春な忘れぞ、

聞きてかうべを誰も皆、涙にこそはむせびけめ』かくて配所の大宰府にうき年月を經たまへど、たゞ謹愼の御心に、纔に見るは、都府樓の、瓦の色の外はなく、たゞ聞く者は觀音寺、鐘の聲のみさやかなり、又あるときは、山わかれ飛び行く雲のかへり來る、空にのぞみをかけたまひ、またあるときは、そのかみの、御宴の事を思ひ出て

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣猶在此　捧持毎日拜餘香

これらの詩歌を味へば、朝廷をうらむ御心の、あらざりけるは、明らけし、さるを雷火となりわたり、落ちぬといふはいかならん、菅根の朝臣時平公、うたれて死せりと云ふはなほ、世の應報の理に、いひ傳へたる說ならん心つくしの沖つ浪、かへらん時も俟ち得、すてくもりかちなる、秋の夜の、長き思ひの末遂に、かたふく月に、空遠く』雲かくれしは、惜しけれど、誠忠なんぞうづもれん、太政大臣正一位、天滿宮と仰がれて、宰府北野の神垣は、いよ〳〵高く世に榮へ、又水くきのあと清く、流れて海山の、末の末迄、御社の、あらぬ里なく心なき、ひなの童のたぐひまで、手習ふ時のはしめより尊ぶ神とぞなりにける』

○勿來關

前九後三の戰場に、功名立てし君が威は、北は奥州外が濱『南は遠く白河のの關のかなたにいたるまで、知らぬものとてなかりけり』一年勿來の關に來て、駒を留めて古郷の山をはるかに眺めみる、君が心のやる瀬なく、頃は彌生の花盛り、何處も同じ春景色、君が頭の白髪も、君が戰の白旗も、關の櫻と諸共に花とばかりに見えにけり』花は散れども君が名は、一度駒を止めしより、口すさみにも皆人の、言はぬものこそなかりけり』

○威海衛

名も高き渤海灣の咽喉なる、威海衛の戰は、吾が聯合艦隊司令長官、伊東中將の手足の如く、率ひたる水雷艇の功は、『聞くもなか〳〵勇しゝ』敵の艦隊勇々しくも、威海衛の要害に、防材堅く布設して、灣内深く潜めつゝ』戰ふ樣もあらざれば、吾が海軍は、朝の雨雪に身を浴し、夕の風に櫛けづり、只遠近を取り卷きて、空しく時日を過せしが、吾が陸軍が、日島と劉公島を除く外、處々の砲臺攻め取りたりとの、信號の旗を見て、伊東司令長官は、急に水雷艇の司令を召し、水雷攻擊を命ずれば、藤田少佐、今井大尉の兩司令、姿勢を正し申す樣、そは吾れ〳〵の望む所なり、されど亦、僅か防材の功れ目を目差し、暗礁多き海なれば、誓ふて功を奏せんものゝ、水雷艇は悉く再び此處に歸るまじ、さらばと言ひて立上り、精忠面に表れしを、伊東司令長官も、そゝろに感じ、落す涙も國の爲め、思ひ切つてぞ分れける、夜も早や更けて月影は、威海衛の山にかくれ、あやめも分けぬ眞のやみ、敵兵夢を結ぶ頃、吾が

水雷艇は、第三艇を先方として、百尺崖のあなたより、波をけつてぞ進み入る、其の勢矢の如く、港灣内につき入れば、斥候の敵艦之を知り、信號の光りきらめくや、灣内俄にさわぎ立ち、打出す速射の砲丸は、雨か霰と降る中を、吾が艇隊は物ともせず、忠義に身をや捨子舟、縱横無盡に走廻る、第九號艇は素早くも、巨艦近に進み寄り、魚形水雷を發すれば水烟一度にどつと上げ、命中の音、天地もさけん斗りにて、艦隊中ばは沈みける」、其の明の夜も此所や、彼處に水雷の、物音凄し、斯く金城鐵壁と頼みたる、旗艦定遠を初めとし、來遠威遠も沈められ、戰ふ力も盡きぬれば、兵士斗りは助けんと、頃は、明治の二十八、二月十二日の朝風に、なびくや力、なく〳〵も、白旗立てゝ降服の使節の舟ぞ見えにける、武士は物の哀れを知るとかや、伊東司令長官は、丁提督の乞を入れ、些か心を慰めんと、贈り物をぞ遣さる、丁提督は悄然として、吾が事既に終れりと、心ひそかに自害して、武人の道をぞ守りける、嗚呼、昨日までも、今日迄も、清國にそうたる、北洋艦隊司令長官、丁汝昌とも、仰がれし身の、斯く成り果つるも敵ながら、亦と得がたき英雄の、末路の程こそ是非なけれ」、此に威海衛を占領し、砲聲全く靜まりて、風雲忽ち一變し、威海の淵にうづ巻きし、鎮遠號を初めとし、濟遠廣丙號、其外砲艦數十艘、檣頭高く雨を呼び、雲を起せし黄龍も、大和劒に角を絶ち、旗は忽ち日の丸の、輝き渡る海軍旗、君が御稜威は天の下、仰がぬ人はなかりけり」、

○夜討曾我

この時二人の扮裝は、母の賜ひし小袖をば、たすき十字にあやどりて、共にたいまつふり照らし、敵工藤の陣屋をば、「探せど如何に人はなし」、如何はせ

んとたゞずめる、折しも見ゆる燈火の影に二人は身を潜め、見れば工藤の局なり、祐經いづこと尋ぬれば、先頃すでに陣屋がへ、不忠ながらも是れまでの、御恩に報ひ候はん、いざ此方へと招きける、雨戸すらりと排し開けば、工藤左衛門祐經は、前後も知らず伏にける、見るに二人の兄弟は、天にも昇る心地して、十郎五郎に討てと云ふ、五郎は兄に讓りける、聲を掛くれば祐經は、枕元なる刀をば、取つて起きんとする、折を、十郎早くも肩先を、五郎がついで首を取る、父の敵を報ゆれば、命は露程も惜まじと、猶も奥へときつて入る、』

○那須與市

その時與市宗高は、免れ難き君命に、屹と心を決しつゝ、射頃やすこし遠かりけむ、駒を浪間に泳がせて、『一反許りゞ進んだる、』頃はやよいの空はれて、春風いたく吹きすさみ、船を搖り上げ搖り下し、覘ひ定むる術もなし、宗高馬上に目をとぢ、南無や八幡大菩薩、殊には那須の大權現、我れ此扇を射損せば、唯此の儘に自滅して、再び人には見ゆるまじ、神もし哀れと思し召さば此の矢外させ玉ふなと、意の中に祈念して、眼を開き見渡せば、風漸くに吹き凪ぎて、的の扇の日の丸も、最とも射よげに見えにけり、宗高感喜に堪えずして、むら重藤の弓を取り、鏑矢ぬいて打番ひ、滿月の如くに引きしぼり、矢聲もろとも切て放せば、覘ひたがはず扇面の要際をば一寸計り殘してこそは射切りたれ、鏑は高く兵と飛び、扇は虚空に舞ひ上り、折りふし吹きくる春風に、もまれて波上に落ちければ、敵も味方も一同に、射たりや射たりと褒る聲、水にひゞきて凄まじき、』

○實盛

落ち行く勢の其の中に、赤地の錦の直垂に、萠黄縅の鎧着て、『鍬形打つたる甲の緒をしめ』、金作りの太刀を佩き、二十四さしたる切符の矢を負ひ、滋藤の弓持ちて、連錢蘆毛の逸物に、金覆輪の鞍を置きて乘りたりけるが、味方の勢は落ち行けども、只一騎返し合せ〳〵防ぎ戰ふ、義仲の方よりは手塚の太郎進み出て、アナやさし、如何なる人に渡らせ玉へば、味方の御勢は皆落ち行き候に、只一騎殘らせ玉ひたるこそ優に覺え候へ、名乘らせ玉へと詞を掛くれば、先づから云ふ和殿は誰ぞ、信濃の國の住人の手塚の太郎光盛とこそ名乘りたれ、さては互によき敵なり、但し和殿をさくるにはあらねど、存ずる旨あれば、名乘ることはあるまじきぞ、寄れ組ふとて馳せ並ぶ

る所に、手塚の郎等主を討たせじと、中にへだゝり、押し並べてムヅと組む、天晴れ己れは日本一の剛の者と、組んで失せよとて、我が乘りたる鞍の前輪に押し付けて、首かき切りて捨てける、手塚郎等が討るゝを見て、左手に廻り合ひ鎧の草摺引き上げて、二太刀刺し、弱る所を組みて伏す、件の侍士痛く軍に疲れぬと覺えて、難なく手塚が下にぞなりにける、手塚馳せ來たる郎等に首取らせ、木曾殿の御前にまいりて、光盛こそ奇異の曲者と組みて討ち參りて候へ、侍かと見候へば錦の直垂を着て候、又大將軍かと見て候へば、續く勢も候はず、名乘れ名乘と責め候へども遂に名乘り候はず、聲は阪東聲にて候ひつると申ければ、木曾殿つら〳〵御覽じて、是は齋藤別當とこそ見つれ、若しそれならんには、義仲が上野へ越えたりし時幼目に、見しは白髮の糟生なりしぞかし、今はゝや七十にも餘り白髮にこそなり

ぬならんに、髮髭の黑きこそ怪しけれ、樋口は年頃馴れ遊びて見知りつらん、樋口召せとて召されたり、樋口只一目見て、アナ無慚是れぞ正しう、齋藤別當にて候ひけりと申せば、木曾殿それならんには、はや七十にも餘り白髮にこそなりぬらんに、髮髭の黑きはいかにと宣へば、稍ありて樋口涙を抑へて申しけるは、實盛常に兼光に逢ひて、物語り候ひしは、六十に餘りて軍陣に向はんときは、髮髭を染めて若やかんと思ふなり、其の故は、若殿原に爭ひて、先を驅けんも大人氣なし、又老武者とて、人に侮られんも悔やしかるべしと申し候ひしが、誠に染めて候ひけるぞや、洗はせ御覽候へと申しければ、義仲さもあらんとて洗はせ玉へば、漆黑と見し髮髭は忽ち白髮にとなりにける、實盛の心中いとど哀れにこそと、並み居る武士ども、鎧の袖をぱぬらしける』

○重盛

天皇の統御しる、この皇國を平けく、豐かに安く護れよと、下し給ひし大將の、印授を帶ぶる我なるに、如何程父の意なればとて、など從はん大逆に、『從はれんや大逆に、』領地は天下の半ばぎ、位人臣の極に居り、子は三鼎に女は后、一門繁榮類ひなし、此ぞひだふる大君の厚き惠によるぞかし、然るに御恩を報ひずして、却て弓を引かんとは、げに獸にも劣りたる、あなあさましの御心と、父を諫むる忠孝の、苦熱の涙時雨なし、衣の袖にふりかゝる厄禍ありと知るや否、父を諫めぬ不孝者、君に刃むかふ不忠奴等、もし宮闕に向はんか、先づ我が首を刎よとて、宗盛以下を睨まへつ、いざや來れと御供を、引連れまして邸へは、歸り玉ふぞ傷ましゝ、平家の運も今は早や、日影傾く

夕暮の無常の風の一陣は、小松が原をいざない吹き、何かは侍たん千代の影、終に果なく朽木とぞ、ならられし公ぞ惜みても、尚あまりあることぞかし』

○阿新丸

初段

日野中納言、藤原資朝公は、後醍醐帝の、密旨を奉じ、北條高時をほろぼして、大御心をやすめんと、『思ひをこらし給ひけり』茲に土岐の頼員は、此資朝卿と、一味のちかひたてながら、妻に心のひかされて、ある夜のむつごとに、くちばしりしが基にて、事たちまちに六波羅へ、洩れ聞えしかば、高時は、しばしも猶豫なさばこそ、資朝卿を佐渡と云ふ、遠き島根に流しけれ、いたわしや、資朝卿の御子、阿新丸は、世にもかしこき母君と、仁和寺あたりのかくれ家に、住せ給ひて世の中の、無常を深くかこちつゝ、またの逢瀬をたのしみに、指折かぞへ待ち玉ふ、其の甲斐もなく高時は、長崎高資の言葉を入れ、佐渡の守護、本間山城入道に下知をなし、資朝卿を殺さむと、いふ企を傳へ聞き、阿新丸は此時、十三才にてましませど、親を思ふほす眞心は、いはほも通す桑のゆみ、なき數にいる父上の、其の御最後を見屆て、共に冥土の旅まくら、結ばむものと思ひたち、突然母君に此事をあかし玉へば、母君は、聲ふるはして涙ぐみ、わすれもやらぬ去年の夏、御父君につれなくも、別れまつりし其後は、御身ひとりと分れては、此の母親が生ながらふべくも思ほへず、ましてや佐渡とやらむは、人も通はぬ、怖ろしき、離れ島とも聞ゆるを幼き御身如何にして、行くべきたよりのあるべきぞ、思ひとゞまり給へよと、宣ふ中に御聲は、涙の雨に打しめり、きぬのたもとも見るうちに、しぼるばか

りになりにけり、阿新丸はきこしめし、恩愛深き母君の、仰せにそむくも不孝なり、又父上の御最後に、おくれ申すも不孝なり、嗚呼母君に仕へんか、御父君を如何にせん、御父君に仕へんか、御母君をいかにせん、いづれにしても兩親に、孝を全ふすることは、とても適はぬ此の身なり、今宵の中に自害して御詫申す外なしと、をさな心の一すぢに、おもひ詰たるありさまを、此方にいます母君は、とく見そなはし其の上に、いたくとめなばまのあたり、又憂目をや見るらんと、思ひかへしてさま〳〵は、兎に角にも阿新が、望みにまかせておかんとて、心きゝたる中間を、差添へられてかくれがをいでます君がうしろ影、見送る慈母のかなしみは、なか〳〵筆につくされず、昔時めく御家も、今は乘べき駒さへも、あらぬなげきを打すてゝ、はきもならわぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露はおかねど草枕、思はぬ旅にいで給ふ、心の中こそ殊勝なれ、」

二　段

去程に阿新丸は、やがて越前の敦賀より、船に召されて海原の、八重の汐路を打渡り、『佐渡の國にぞ着き給ふ、』たよる家とてあらざれば、本間が館におとづれて、某は日野中納言資朝の一子にて、阿新丸と云ふものなり、父が此世にいますうち、相見んものと玉敷の都を出でゝ、足引のけわしき山も海神のいかなる涙路もはゞからず、はる〳〵越えて此佐渡に、まかり下りしあはれさを、聞き分けられて對面を、ゆるし玉へと懇に、くり返しつゝ宣へど、本間なか〳〵聞入ず、資朝卿をいれおきし、牢屋の内を目の前に、儘かへだてゝ此方なる、持佛堂にぞいれにける、資朝公は此事を、きこしめされて

打しほれ、生て逢ふこと叶はずば、死して千草の葉かくれに、ひとりまろびて思ひ寢の、夢に見もせん逢いもせんと、悲しみ給ふ御すがた、よその見る目もあはれなり、扨日も西に入相の、鐘の響ともろともに、行水を奉れば、資朝卿は、最後の時になりぬとて、用意の駕籠にぞめされける、爰より十丁ばかりを隔たる、さびしき河原のありけるが、程よき所に人夫らが、駕籠舁きすえて控ふれば、資朝卿臆し給ふ氣色なく、敷皮の上に居直りて、世辭の頭をぞかゝせ給ふ

五蘊假成形　四大今歸空
將首當白刃　截斷一陣風

其の奥に、嘉暦元年五月二十九日、日野中納言藤原資朝と、記させ給ふやいなや、河原のあしに身をてがす、ほたるの影は太刀風に、さつと散りてぞ失せにける、やゝありて御なきがらを、阿新丸に奉れば、阿新丸一目見たまひて足手もたへて、倒れ伏し、嗚呼情なき本間かな、海山越えてはるゝと、來りし我れに告もせて、なきがらばかりあたへしは、かへすゝも口をしと、御袖顔にあてたまひ、しばし人目も憚からず、泣きふし給ふありさまは、實にことはりと知られたり、暫くありて身を起し、無念のなみだ押拭ひ、めし使ひたる中間に、其なきがらを守らせて、高野山に送りつゝ、御身はあとに留りて、思ひにしづみ給ひしは、これ又深き所存のあることゝ、のちにぞ思ひしられける、」

三　段

去程に阿新丸は其體を晴さんと、ひるは病といちはりて、旅の衣をしきた

への『床に伏してゞ忍ばるゝ』夜はひそかに起いでゝ、本間がねやを問ひ給ひ、陰もあれば親子の中、ひとりたりとも刺し殺し、腹を切らんと思ひつめしのびく〳〵ておはせしが、ある夜あめかぜ烈しくて、番の者供油斷なし、おもひ〳〵にいねければ、願ふ所の幸と、いさむ心を押し沈め、そつと伺ひ見給ふに、本間が運や强かりけむ、常のふしどを替へたれば、猶奥深くしのびいり、さがし給ふに二間なる、奥にあたりて燈火の、影明かに見えたれば、板戸の外に身をちゞめ、首さしのばし見給ふに、目ざす仇にあらずして、資朝卿を斬りたりし、本間三郎にてありければ、案外なれど是れもまた、時にとりての仇なり、あるじの入道にまさるとも、よもや劣れはいたさじと、ふた足三足すゝみより、息をこらして立ち給ふ、もとより腰に大刀はなし、殊にともしびあかければ、千にひとつも目をさまし、聲たてられては一大事、いかゞはせんと腕をくみ、案じわづらひ給ひしが、折節夏の事なれば、蛾と云ふ虫が燈火の、影を慕ひて飛び來るを、うちに入れむと思ひつゝ、障子を少し明け給へば、あたりまばゆき燈火の光りはつひに虫のため、さへてあとなくなりにけり、仕濟たりと思ひつゝ、かれが所持なす一刀を、とるより早く拔き放ち、首落さんとしたまひしが、いねたる人を討たんてと、死人を斬るにてとならず、目をさまさせて斬らんとて、足踏ならし立掛り、はたと蹴放す小枕の、音に驚き起あがる、本間がうへにまたがりて、臍の上よりたゝみまて、柄も拳もとほれよと、力にまかせ刺し通し、かへす太刀にてのど笛を、心のまゝに搔きさつて、うしろにあたる竹村のうちを目掛てしゞ〳〵とかくれ給ひしふるまひは實にをゝ敵くゞ見えにける』

四段

去る程に番のものはこの音に驚かされて狼狽し、とるものもとりあへず、馳せあつまりてともし火を、とぼして見ればこは如何に、をさなき人の足しあとは、『阿新殿に相違なし』いざ打とらむと松明をかざして庭のすみまでも、さがせど影もみとめ得ず、阿新丸は、人手に渡らぬ其さきに、自害せんとは仕給へど、まださきに望みある身の上なれば今こゝを逃れて帝の御馬前に、功名手がらはして、父の宿意も達しなば、是こそ忠臣孝子なれと、思ひ返してふる雨に、ぬれてなびける呉竹の、枝にすがりてやうゝと、高き梢によじのぼり、目にあまりたる大堀を、やすゝ越えて鳥羽玉の、夜はまだ深き丑寅の、ころほひなれば幸ひと、磯邊のかたを心掛け、たどり給へど夏の夜は、まだ宵ながら、あけぬるを、雲のいづこに月やどるらむと、謠ひし如く横雲は、はや遠山の端にあけ離れ、見あらはされぬ其のひまに、麻や蓬のしげりたる、ふかみがなかに身をかくし、追手を逃れ給ひけり、終に其日も暮れければ、又忍び出て行き玉ふ、をりから神も孝行の志をや感じ給ひけむ、いたく老ひたる山伏に、はたと行合ひしかと、事の仔細を宣へば、山伏聞て哀に思ひ、御心安くおぼしめせと、足もたゆめる阿新丸を、肩にかきのせ足ばやに、ゆけば程なく荒磯の、浪打つ際に出でにけり、遙の沖を見渡せば、今もや船の出なむと、ずるを手をあげさし招き、呼はりければ揖子共は、更にこれをば耳にせず、櫓櫂を立て漕いだす、山伏大にはらを立て、柿のころもを結びあげ、漕ぎ行く舟に立ちむかひ、いらたか數珠をさらゝと、音もしげく押揉て、秘密の呪文をとなへ、明王の本誓誤らずば、權現

金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、其船こなたへ返へし給へと、肝膽をくだきつゝ、をどりあがりて所りければ、其の念力や通じけむ、俄かに逆風吹起り、逆卷なみに大船もくつがへらむとする形勢に、揖子共大に恐をなし、山伏の御房助け玉へと手を合せ、膝をかゞめて伏し拜み、船をなぎさに、漕戻す、左こそあらめと山伏は、阿新丸をたすけ上げ、水主の乞にまかせつゝ、屋形のうちに入ければ、波風忽ちしづまりて、船は港を出にけり、此時きのふの追手共、百四五十騎馳せ來り、其船戻せと鞭をあげ、皆同音に呼はれど、順風に帆をあげてはせ行く船のことなれば、見る〳〵影もきえうせて、船は其日の夕まぐれ、越後の府にぞ着きにける、嗚呼阿新丸の眞心は、天津みそらの月と日の光りと共にあがねさす、我が日の本にかゞやけり、

○楠公

初段

延元元年五月のはじめ、足利尊氏、同左馬頭直義、大勢を引率し、都へ攻めのぼる趣、新田左中將義貞、急使をもつて奏聞ありければ、『宸襟もつともやすからず、』楠判官正成をめされ、急ぎ兵庫に下向して、義貞に力を合せ、合戰すべしと仰せらる、正成かしこまりて奏聞しけるやう、尊氏既に、筑紫九ヶ國の勢をひきゐ、上洛することなれば、さだめて勢は、雲霞の如にぞ候はむ、味方のつかれ果てたる小勢にて、機にのりたる太勢にかけあはせ、尋常の如く戰はゞ、味方の敗北は、鏡にかけて見る如し、急ぎ新田をめさせられ、前の如く山門へ御臨幸在らせらるべし、しからば正成も河内へくだり、畿内の

勢を以て、河尻をさし塞ぎ、尊氏を都へ進ませ、双方より、兵粮の道を斷ちきらば敵は次第々々におとろへて、味方は日々に集るべし、此機に乘じ、新田は大手より押よせ、正成は搦手より攻め上らば、朝敵を一戰にほろぼさむこと、何の疑か候ふべき、新田も此所存とは、存じ候へども、敵を眼のあたりに受けながら、軍もせで引揚げむ事、人のおもはくもいかゞあらむと、終に兵庫にさゝへしならむ、合戰は兎も角も、軍は始終の勝こそ肝要なれ、能々、敵慮を廻らされ、公議を定めらるべしと、奏聞ありければ、坊門の宰相清忠進みいでゝ申さるゝやう、正成の云ふところ、そのいはれなきにあらざれども、征討の爲に、差下されたる節度使が、いまだ戰もせざるさきに、帝都をすて、一年のうち兩度まで、山門へ御幸あらせられむとは、一は帝位の輕きに似、一は官軍の道を失ふなり、たゞとひ尊氏、筑紫の勢を率ゐ上洛すとも、昨年東八ヶ國の兵をしたがへて、のぼりし時の、勢にはよもすぎじ、凡そ戰の初めより、味方の小勢をもつて、敵の大勢を、攻なやましたるはいくたびぞ、是れ武略のすぐれたるにあらずして、全く聖運の、天に叶ひし故なり、しからば戰を、帝都の外に決し、敵を鐵鉞の下に、ほろぼさむこと、何の子細かあるべきぞ、只時を違へず、正成は差下されむこそ、しかるべけれと、奏聞ありければ、公議これに定まりて、其旨敕諭あらせらる、正成は最早せむかたなしと、屈竟の精兵、五百余騎をしたがへて、五月十六日に都を立て、急ぎ兵庫へぞ下りける、爰にまた正成の一子、正行は、今年十一歳なれども、父の決意を察せしにや、何處までもと從ひ行き、正成思ふ所存のありければ、櫻井の宿において、正行を膝元ちかくめしよせて、つくづく數へさとされけるは、彼の獅子と云ふ猛獸は、子を產みて三日をすぐるにあたり、數千丈の絶壁

より谷底深くなげおとす、其子獅子の器量あれば、ちゆうより刎かへりて、死せずと云へり、況むや汝は、人界に生を得て、既に十一歳にもなりぬれば、父がをしへは守るべし、此たびの合戰は、天下安危の定まるところ、われ討死せむ其後は、尊氏天下に縱横し、蒼生を惱まし奉らむ、汝正行、其不義の勢ひに恐れ、身命を助からむため、多年の忠烈をすて、かれに服從することなかれ、一族郎黨の一人たりとも、生きながらへてあるならば、金剛山に引こもり、敵よせ來らば、命を由基が矢先に掛け、義を紀信が忠に比し、一歩も引くことなかれ、此肌のまもりは、ひとゝせ都攻のありしとき、かたじけなくも帝より、下し賜ひし綸旨なり、今は是をば讓るべし、父が志を繼ぎ、帝に忠義をつくしなば、是ぞ親への孝行と、申し含めて正行の、顏のあたりに手をあてゝ、是が此世の見終めと、おもへば猛き大丈夫の、心もいまはみだれがみ、かきあげつゝもいくたびか、ふりかへり見てなく〳〵も、名殘をしげに別れける、世の盛衰を觀察し、一子を殘して、無き跡までの義を勸むるこゝろの中こそ殊勝なれ、」

二　段

時しも五月二十五日、煙波渺々たる海の面、十四五里が程に、「數萬の兵船帆をあげて寄せきたる、」かゝる所に、須磨の上野と鹿松の岡、鵯越の方より、ふたつ引兩、四ッ目結ひ、左り巴とその旗、五六百旒、朝の嵐にひるがへし、雲霞の如くに寄かけたり、正成これを見て、舍弟帶刀正季に申さるゝやう、敵海陸をさへぎりて、味方は陣を隔てたり、今はのがれぬところなり、まづ前なる敵を追ひまくり、うしろの敵と戰はむ、正季これを承り、我手七百餘騎を

前後にそなへ、大勢の中へ割て入る、直義の兵ものども、菊水の旗を見て、能き敵なりと思ひければ、取りこめて討むとしけれども、正成正季東より西へ切て通り、北より南へ追なびけ、能き敵と見受れば、馳ならべ、組むて落て は首を取り、雑兵の奴輩は、ひと太刀打てかけちらす、正成と正季と、七たび合て七たびわかる、其心偏に直義にちかづきて、組で討むと思ふにあり、遂に直義の五十萬騎は、正成の七百餘騎に切立られて、又須磨の、上野の方へ ゞ引かへす、直義の乗たる馬は、鏃を蹄に踏たてゝ、ひるむ所を、正成の軍兵ども是を見て、いざ討とらむと駈よるを、藥師寺十郎次郎只一騎、蓮池の堤にとつてかへし、駒より飛び下り、長刀の石突をとりのべて、よせくる敵のひらくびむながひの引廻し等、切ては刎倒し、倒しては刎ね、またゝくひまに七八騎ほど切て落す、其のひまに、直義は駒を乗りかへて、やう〳〵落ち

のび得たりけり、尊氏此よしを見て、荒手を入れかへて、直義をうたすなと下知すれば、吉良、石堂、高、上杉の人々、六千餘騎にて、湊川の東へ駈出て、あとを切らむと取りまきたり、正成正季、又取てかへし、此勢に渡り合ひ、うちつうたれつ、火花をちらして戰へど、軍兵どもゝ、其の身鐵石にあらざれば、次第〳〵に打死し、殘るは僅七十三騎なり、此小勢にて敵を打破り、落なば落べかりけるを、正成都を出る日に、思ひ定めし事あれば、皆打死と覺悟して湊川の、北にあたりし一と村へ、七十三騎引揚て、やすらふうちに一族は、軍兵どもとともに、腹掻切てぞうせにける、正成正季に申さるゝやう、そも〳〵最後の一念により、善惡の生を引と云へり、九界のあひだに、いづれか願なると問ひければ、正季打笑ひ、なゝたび人間に生れ來て、朝敵をほろぼさばやとこそ、存じ候へと申ければ、正成世にうれしげなる氣色にて、歸

業深き惡念なれ共、我も左樣に思ふなり、いざさらば、同じく生をかへ、此本懷を達せむと、誓て兄弟差ちがへ、一ッ枕に伏されけり、嗚呼此最後こそ、實に武士のかゞみなれ、嗚呼此最後こそ、實に武士のかゞみなれ』

○木崎原合戰

初段

世間の現象を觀ずるに、積善の家には餘慶あり、積惡の家には餘殃あり、『尤愼むべきは此道なり、』爰に薩隅日三州の大守、島津修理大夫義久と申し奉るは、忝も清和天皇の御苗裔、鎌倉右大將征夷大將軍、源頼朝公の御子、左衛門尉忠久公より十六代目の御嫡孫なり、文武二道の名將にて、上を敬ひ下を撫て、仁義正しくましませば、靡かん草木はなかりけり、御舍弟には兵庫頭忠平公、左衛門尉歳久公、中務太輔家久公、迎何れも文武の名將也、其外家の子郎等に至る迄、皆忠勤を勵ませば、古今稀なる御果報、近國他國の者迄も羨まざらんはなかりけり、是は扨置き爰に又、大職官の御末に、伊豆國の住人、伊藤入道若心が末孫に、伊東左京義祐迎て、弓取一人おわします、其比日向國都の郡に住給ふ、其心あくまて不敵にして、仁義の道を學ばす、上を敬ひ下を憐む心なく、我意に任せて擧動へば、恐れぬものこそなかりける、去れば古人の言葉にも君臣を見ること手足の如くするときは、臣君を見ること服心の如くす、又君臣を見ること土芥の如くするときは、臣君を見ること、唯寇讐の如くす、曰く義に從ふときは聖なり、諫に從ふときは賢なり、然るに義祐道に違ひし有樣を、譜代好みの家臣ども、諫言すと雖も、曾て用ゆる心なく、却て疎み遠ざける心の内こそ淺間しけれ、大欲心の餘りに

や、大隅薩摩に發向し、我三ヶ國の主となりて、子孫榮華に榮えんと、明暮便を廻らせども、飯野の城には兵庫頭忠平公、智仁勇の三德を兼備へ給へば、小勢を以て叶ふべき樣は更になし、去れば球摩の城主相良に加勢を乞はんとて、家の子に伊東加賀守祐安と申者あり、是を近付け、事の樣子を言ひ含め、相良方へぞ遣しける、頓て球摩にも成ぬれば、案内乞ふて内に入る、直に相良に對面し、能くこそ御出候なり、事の子細を聞く上は、必ず御加勢申さんと左も潔く返答す、先首途を祝はんと、酒など樣々進めつゝ、約束違はん其爲めに、小金作の太刀一振、加賀守へぞ引れける、祐安悅喜限りなく、約東堅く相極め、日向を差してぞ歸りける、義祐此由を聞召し斜に悅び、家の子郎等相集め、内議評定取々也、爰に野尻の城主に福永丹波守祐友と云ふものあり、仁義を守る勇士にて、少も憚るところなく、進み出で申す樣、某退て愚案を廻らし候に、彼の島津殿と申すは、忝くも清和天皇の御末、多田の滿仲より以來、弓箭の家に譽れを取り、政道を堅くし給へば、御家の家臣に至るまで、數代の好みを忘るゝ者迚は聞ざる所也、皆忠勤を勵ませば、心を變ずるもの迚は、稀にも聞かざるところなり、是は强敵の大敵なり、御當家の兵と申すは、譜代の士少くして、皆方々の假弐者也、殊に相良の某は、一皮心の表裏心と承れば、無二の味方とは言ひ難し、小勢を以て大敵の剛敵へ働き給はんと、譬ば螳螂の斧を以て、龍車に向ふが如くなり、是は又事新しく申す事にて候へ共、御先祖祐高公は、島津久豐を御聟に取給ひ、其の威光を以て日向國拾一ヶ國を打平げ、個樣に榮へ給ふも、是偏に島津殿の御恩なり、思を得て思を知らぬは木石に等し、左こそ佛神三寶も惡しと思召さるべし、先我々共の所存には、島津殿の御旗下に成らせ給ひ、先陣の御働き

忠義を盡させ給ひなば、九州殘らず島津殿の御手に入るべし、其時こそ二國三ヶ國をも島津殿より給はるべし、然あらんときは御家長久、御子孫繁昌たるべき、事何の疑ひか候べき、先此度の御合戰は思召留り給へ、平に〻〻と理を盡して諫めける、義祐素より無道人のことなれば、以ての外に腹を立て、今に始めて福永が賢人達の可笑さよ、理非は兎もあれ角もあれ、球磨に約束する上は、早打立て諸共と、周章ふためき勢揃へ、先一番に伊藤加賀守祐安、同じく新三郎祐信を兩大將として、七百餘騎を差遣はし、頓て福永を前に召れ、いかに福永弓矢の家に生れ來て、臆病未練の擧動かな、我に二度對面無用と言ひ捨て、我が身も二千余騎を引具して、二陣に續きて出給ふ、天理に背く此度の、合戰危しと言はん人者こそなかりける、兎にも角にも義祐の、心の内こそ淺間しけれ。

二段

去程に飯野にまします、兵庫頭忠平公は、智惠第一の大將なれば、兼てより伊東方へ忍びの者を入れ置き給ふ故、此事早くも聞召され、『方〻の味方〻へ飛脚を越して告げ玉ふ、』先第一番に菱刈表の軍兵共、勇み進んで馳集り、忠平公を初め、川上三河守忠智、岡助七忠賢、上原長門守、山田新助、同名彌九郎、村尾源左衛門尉、五代勝左衛門、比志島紀伊守、喜入攝津守、黑木播摩を先として、屆竟の兵者共三千余人を相勝り、木崎原の關所〻〻に伏せ置き、伊藤勢を菱刈表へ遣り過し、跡を取切て皆悉く、打亡さんと待ち玉ふ、是を知らで伊東勢、早や加久藤迄は發向す、菱刈表の兵者共、願ふ所の幸と、五十騎百騎は爰の畧、彼所の谷のつまり〳〵に馳せ集り、鬨の聲を措げ、弓鐵砲

を放ちかけ、おめき叫んで戰ひける、伊東方は小勢にて、珠摩の加勢を今や〳〵と待ちけれど、相良何とか思ひけん、一騎も勢を出さねば、前後の敵に取圍まれて十方に暮て居たりける、斯かる所に伊東加賀守の郎等に、柚木崎丹後守政家と申す者あり、文武二道の勇士にて、黒皮威の鎧着て、五枚甲の征矢を負、五人張の塗込籐の弓を持ち、鹿毛なる馬に乘りたりしが、進み出て申樣、誠に人の心と川の瀬は、一夜に替る習ひにて、覺悟の前にて候得ば、今更驚くべき樣は更になし、斯る時命を惜み生んとすれば必ず死す、唯一筋に思ひ切り、一方を打破り通るべしと、諸軍勢に下知をなし、小林さして引て行く、後れ軍の習にて、我先にと足を亂して落ち行けば、路より敵は群がつて、時の聲を造り掛け、繁くしとうて追ひかゝる、丹後守之を見て、斯くては叶ふべからず、某一人跡に留り防ぎ矢を射て味方落さんと、後陣遙かに引さがり爰に控えし兵者は、伊東の郎等柚木崎丹後守政家と申す也、近國に隱れもなき强弓の精兵、矢繼早の手利なり、日頃音にも聞せ給ふらん、今は能く見よ汝等共、矢先に敵は嫌ふまじと、五人張に十五束引絞り差取引結射る程に、矢面に進む兵者共、生死は知らず、二十八騎は射て落す此勢に恐れをなして、勝に乘りたる島津方の大勢、しどろになつて暫しが程は進み得ず、其の隙に伊東勢漸々引て行程に、木崎原にもなりぬれば、忠平公の御勢此由見るよりも、伊藤勢は一騎も殘らず討取れと、時の聲を堂とあげ、おめき叫んで戰ける、伊東勢も爰を破られては叶ふまじと、面も振らず、遮る敵を弓手右手に打伏せ、切先より火花を散し、鎬をけづり鍔を割り、切羽の金も未塵になれと、爰を先途と責戰ふ、未だ勝負も見へざるに、島津方より川上三河守忠智、同助七同忠賢、上原長門守を先として、物に馳れ

たる屈竟の兵、五百餘人を相勝り、兎有る木蔭を馳せ廻り、義祐の旗下に蟻地に切て入り、縦横無盡に切立れば、思ひもよらぬ伊東方、風に木の葉の散る如く、四方にさつと散にける、島津方大勢前後より引包み、追伏せ〳〵討つ程に、時を移さず伊東方、名有る伊藤宗右衛門、伊藤權之助、落合源左衛門、尉、佐土原四郎兵衛を先として、五百余人は悉く名乘て打死す、其外敵兵共其所や彼所のつまり〳〵に追詰められて、討るゝ者は數知れず、斯る所に伊東加賀守祐安は、落る味方の勢に薙立られて、心ならずも五町計りは落ちたりしが、兎有る高見に馳せ上り、臆病至極の奴原共、何國まで落行くぞ、返せ戻せと味方の勝を大音あげて呼はれど、引立ちたる勢のことなれば、耳にも更に聞き入れず、我先にと小林さして引て行く、祐安心に思ふ樣、我れいやしくも伊東殿の家の子と生れ、此度先陣の大將を承り、まだ一軍の利も得ず、何の面目ありて古郷へ歸り、人々に對面せん、いざ打死せんと駒の手綱を引戻し、大音揚て名乘樣、茲に控へし武士は、伊藤の家の子に、伊東加賀守祐安と申す者也、君恩を報ぜん其爲めに、唯今うち死致す者なり、我と思はん者あらば、懸れ〳〵と呼はりける、島津方に於て澁谷上總守國重郎等、澁谷上總守國重と申すものなり、日頃旁々音にも聞つらんと言儘に一同に馬より飛び下りて、互に打物抜き持て、追つまくりつ火花を散して戰ひける、未だ勝色も見へざるに、同重いざ組んと討物投捨て懸寄るを、祐安共に討物投捨、心能くむずと組、國重危く見えければ、國重が郎等二人之を見て、主を打たせては叶ふまじと、弓手妻手よりむつと粗、上を下へと返しける、祐安元より大力なれば、物の數とも思はず、彼二人の者共の肘を搔

掴み、此所彼所へかつぱと投げ捨て、國重を心安く取て押へ、已に首を掻んとする所に、國重が弟軍八國直、兄を打たせては叶ふまじと落重り、祐安が草摺をたゝみ上げ、柄も拳も通れ〳〵と、三刀刺て呼はる所をはね返し、終に祐安が首を落す、仕濟したりと言ふ儘に、凱歌をどつと揚げ、陣所をさして引て行く、痛はしや祐安が歳を積れば、未だ惜かる三十一、其の年の年號を申せば元龜三年壬申正月四日也、國重弟の手柄の程は、天情勇士擧まれやと、皆一同に感じける』

三　段

去程に、加賀守が郎等一人打漏されて、新三郎に追ひ付き、斯樣〳〵と告げければ、新三郎之を聞き、『偖は中々祐安殿打死とかや、』兩大將の者若が一人打れ一人歸りて如何せんいざ打死せん附從ふもの一人も殘らず落行て義祐の先途を見るべし、暇取らする是迄なりと言ひ捨て、駒の手綱を引返し、島津方大勢の中へ割て入り、面も振らず火花を散らし戰ひしが、向ふ敵七八騎を討取、我身も數ヶ所の疵を蒙り、今は是迄也と思ひ切り、馬より飛び下り自害せんとする所に、敵の兵透間もなく馳來り、祐信心得たりと言儘に、眞先に進む兵共、諸膝薙ひて切伏る、二番に續く兵と引組て差違へ、共に空敷成にける、痛しや隆信が歳を積れば未だ惜がる年は生年十七歳、天晴勇士の兵者かなど、惜まぬ人てそなかりける、』爰に又柚木崎丹後守政家は、只一人踏止り、是は義祐の郎等に、柚木崎丹後守政家と申す者なり、忠平公の御内に名ある士候はゞ申上度子細ありと大音揚げて呼はれど、勝に乘たる雜兵共、耳にも更に聞き入れず、我先に打取んと遮るを、丹後守此由

見るより、理非をも知らぬ奴原共、其所立退けと言儘に、遮る敵を弓手妻手に切捨て、忠平公の旗本に眞一文字に駈け來る、忠平公此由御賢じて、是は伊東に於ても名有る士と聞く、子細を答へよとの玉へば旗本の兵共丹後守を中に取圍む、丹後守は馬より飛下り、打物彼所へ捨て、いかに方々呼を靜めて聞き給へ、我等が主の義祐は、島津殿の御恩を蒙り、子孫榮華に榮へし人なりしが、斯る逆心を企て天理に背き申さるゝ故、今度の合戰は皆悉く敗軍す、家の滅亡遠からず、我々共も皆島津殿に降參申上度候へ共、忠臣は二君に仕へずと、本文の言葉に恥ぢ、唯今爰にて打死致す也、茲に幼少の一子を忠平公に頼み奉る、哀れ貴ときも賤きも、子を思ふ道に迷ふとは今こそ思ひ知られたり、此事申さん其のために是迄參り候也、早首召れ候へと、甲を拔て彼所へ捨て、問糺してゞ居たりしが、忠平公此由聞召れ、一子の事は扨置き、汝も降參仕れ、平に〳〵との給へば、こは難有御諚かな、さあらば御共申さんと腰の差添引ぬき、笛の鎖をかきはなし、朝の露と消にけり大將初め見る人聞く人鎧の袖をぬらしける、』斯樣〳〵に打死し、彼方此方に時刻を移す其の隙に、大將の義祐は虎口を逃れ、漸々都の落ちたりしが島津の兵者共、我先にと追ひかくる、忠平公此由御覽なされて、勝に乘じ長追して惡かるべし、先引取れや者共と、諸軍勢に下知をなして引き玉ふ、忠平公は伊東勢に打勝て、飯野の城に引歸し、定めて義祐今度の恥を雪がんと再び打つて出るべし、油斷するなとの給ひて、遠見を出し忍びを入れ置き、御用心は隙もなへ、』茲に川上三河守、上原長門守を初めとして、家老の面々申樣、臆病神の附果たる伊東勢、何程の事が仕出すべき、此勢に境目堅打越し、御働き候はゞ、手に立つ者は候まじと、勇み進んで申上れば、忠平公此

由聞召され、此儀尤も去りながら、黄犬却て虎を噛み、窮鼠却て猫をかむと云ふ事あり、伊東も名ある大將、侮りては惡かるべし、假令亡ぶる共、味方大勢打取るべし、時節を待とて宣ひて、境目堅く打寄り、日月を送りてゐはします『是は扨て置き、伊藤入道義祐は、今度木崎原の合戰に、家の子郎等殘り少く打なされ、無念至極はなかりける、今一度境目を打越へ、余多の城を攻め落し、會稽の耻雪がんと、明暮便りを廻させても、臆病神に誘れて、妻子を匿し落支度をぞ仕たりける』茲に野尻の城主に福永丹波守義友は、此由を聞き伊東殿の御家滅亡すべき時節は此時也、我度々諫言しけるに、忠言耳に逆ひ却て不興彼り、此三年が程は對面なし、我れ賤くも人界に生を得、忠臣の義をつくし、君を諫むる甲斐もなし、無念至極に思へども、是も譜代の主君なれば、恨みる所は更になし、傳へ聞けば伊東殿、未だ前非を悔ひ給はず、再び薩摩に發向せんとの企て有るよし、君辱しめらるゝ時は、臣以て死すと言ふ事もあり、我れ家臣の身として、今一度諫めざらんも、耻辱の至りなるべしと、一通の諫言狀を認めて、態と名字を書かざりしが、夜半にまぎれて忍び入り、伊東殿の門前に立置きて、宿所をさして歸りける、兎にも角にも福永が所存の程こそ、天晴剛の勇士かなと、皆一同に感じける』

○俊　寛

初　段

あだまもる、筑紫のはての薩摩潟、鬼界が島のあら磯に『治承元年夏五月、』流され給ひし人々は、右近衛の少將成經、檢非違使平の入道康頼、法勝寺の執行俊寛僧都の三人なり、うき艱難を此島に、送り給ふ其うちに、大赦の命を

ぞ傳へらる、思ひもかけぬことなれば、あらありがたき御諚やと、三人ひとしくひざまづき、うや〳〵しくも令狀を押戴きて成經は、うれしき涙に袖ぬれて、聲もふるへてさら〳〵と、讀得給はぬ形勢を、康頼取りてやう〳〵によみあげたまふ趣きは、このたび中宮、御産の御祈禱に、非常の大赦、行はるゝにより、鬼界が島流人のうち、成經康頼を赦免すと、讀み給ふとき俊寛は、あつと驚きかしらを揚げ、何とて某が名を、讀落し給ふぞと、言葉せはしく問給へば、康頼も打驚きて聲うるみ、實にいぶかしきことなれど、御名は更に見え侍らず、俊寛聞いて、扨は筆者のあやまりか、今ひとたび、よませ給へとありけるを、使の元康進みより、某都にて承り候も、成經康頼のふたりは、御供いたせ、俊寛ひとりは此島に、殘し申せとの御事なり、嗚呼、こは、如何に、何事ぞ、罪も、同じく、配所も、同じ、非常も、同じ大赦なるに、獨り、暫ひのあみに、もれ、沈むは、何の因果ぞや、げふまでは、三人一所にありてすら、さもおそろしくすさまじき、荒磯島に、只ひとり、離れて海士の捨草の、浪のもくづに、あらねども、よるべもしらぬうき身やと、歎くにかいもなぎさなる、千鳥と共に鳴くばかり、思ひにあまる俊寛は、さきに讀みたる卷物を、いくたびとなく打ひらき、あとくり返し見玉へど、成經康頼とあるばかりにて、僧都とも俊寛とも、かける文字は更になし、こは又夢かまぼろしか、夢なれば、さめよ〳〵とのたまひて、獨り涙にむせびてし、

玉兎昼眠雲母地　金鷄夜宿不萠枝
寒蟬抱古木一　鳴盡不回頭

といふ詩の心は、俊寛僧都の身の上と、今こそ思ひしられけれ、」

二　段

去程に、時刻うつりてかなはじと、楫子の言葉にせかれさて、名殘は更につきねども、成經は夜の衾を、康頼は法華經一卷を、各かた身に殘し置き、『さまなぐさめ參せて、』船に乘らんとし給ふを、俊寛袂にすがりつゝ、元康聲をあらゝげて、僧都は叫ふまじと云ひ放つ、嗚呼うたてやな公の、私といふことあれば、せめてはむかひの地までなりとも、情にのせてつれ給へと、涙を袖につゝみかね、のたまふ聲のをわらぬに、哀れや無情の楫子共が、櫓櫂を振揚うたむとす。俊寛今は、叫はじとや思ひけん、すがる袂の手を放ち、一時は宿に歸らむと、踵はあとに歸せども、かへらむものは心にて、楫子の無情も元康の怒る言葉も打ち忘れ、又立寄りて出船の、綱にとりつき引とむ

る、楫子共綱をしきつて、船を深かみに押し出す、せむかた涙にをどりこみ、船よ〳〵と呼はれど、かへす摸樣もあらざれば、ちからをよばず俊寛は、もとの渚にひれふして、彼の松浦さよ姫の、歎きも我に及ばじと、悲しみ給ふもあはれなり、時を感じては、花にも涙をそゝぎ、別れをしみては、鳥にも心を動かすと、いふことあれば、人として、なげき別れのかなしみを、しらぬものこそなかるらめ、されば成經も、康頼も涙ながらにさし招き、われら都に上りなば、善きやうにとりなして、やがて御迎に參るべし、心強く待たれよと、宣ふ聲もかすかなる、たのみを濱のまつかげに、聞やいかにとゆふ浪の、よするまに〳〵俊寛は、只手を合せ頼むぞと、呼はる聲も呼ぶ聲も、次第々々に遠ざかる、船もかすかに人かげも、消えて見えなく成にけり、消えて見えなくなりにけり、』

○四條畷

初段

時しも御代は正平の、三年の春の初めにて、吉野の山は白妙の、雪に梢も埋められ、萠出る木々の下草は、みな足下の足利に、『蹈れ敷かれて哀れにも』延る力もなよ竹や、折ても操變へまじと、誓ひし公は去年の冬、吉野に詣て大君の、龍顏拜し奉り、亡父正成が先帝に、仕へて忠を盡したる、其の赤心を受繼て、我とも心筑紫潟、浪と寄せ來る賊軍を、拒ぎ戰ひ退けて、君の厳慮休めんと思へど我は不幸にも、病の多き身なる故、空しく月日を過す内、若しや病に冒されて、蓐の上に玉の緒の、絶ゆる事の有るならば、君の爲めには忠ならず、なき我父に孝ならず、病の爲めに果敢なくも、黄泉の鬼となるらんよ

り、此所に寄せ來る賊兵と、刄を交へ潔く、生命を捨てゝ忠孝の、道を全ふせんものと、思ふ心の有明の、月の君とも稱へつる、隆資卿に細々と、告ぐるを何時か大君は、御簾の内より聞し召し、最とかしこくも行在の南の椽の端近く出御したまひ拜謁を、許したまひし其時に、朕は汝を股肱ぞと、思へば深く己が身を、厭ひ慎み必らずも、生て歸れと有がたき御語下し給らば、朝臣は地に額つき、只伏拜むばかりにて、答へ奉らん言の葉も、涙の雨に伏折れて、搖け兼たる風情なり』

二段

朝臣は漸々立上り、あつき涙の降りかゝる、鎧の袖を拂ひつゝ『徐に行在を退りいて』一族郎等を隨へて、先の皇帝の御陵に、參詣て、前に跪き、戰ひ若も

利あらずば、生て返らぬ覺悟故、此の世の別れ告げんため、遙々此所に參りしと、云ふも濡れる涙聲、濡てぞ量さ袂をば、絞りもあへず立上り、如意輪堂に赴きて、御佛拜み奉り、夫れより堂の壁の面に、死を誓ひたる義士の名を、記し〻數は百余人、朝臣は鏃取出し、落つる涙を拂ひつゝ、氣を張りつめて梓弓、引き返さじと思ふより、なき數に入る忠臣の、名をぞとゞむる名歌を、ば、彫りつけ玉ひ去はとて、吉野を發し河内なる、四條畷にうち向ふ、時は十二月の廿日すぎ、七日の日にぞ有にける』

三段

一夜の夢に去年と暮れ、明れば年も新玉の、春とはいへどまだ寒き、『北山おろし吹まゝに、旗靡し攻來る、八萬余騎の賊軍と、四條畷に戰ふて、身をも家をも打忘れ、只大君の御爲と、矢猛心を振起し、力を極めて身を盡し、拒ぎし甲斐のあらばこそ、篠突如き矢の雨に、痛くも其身を痛められ、肉裂け血汐滴りて、今は一歩も進まねば、いざ是迄と大君の、在せる方を伏し拜み賊の方をば打にらみ、骨肉分けし同胞と、互にさしつさゝれつゝ、飯盛山に程近き、四條畷の夕けむり、消て歸らぬ旅の空、ふむ道柴の露とこそ、なられし公ぞ悼ましき、去れど朝臣の功積は、譽となりて千代よろぴ、後の世迄も著く、吉野の花と諸共に、今尚四方に香しく、忠臣孝子の鑑ぞと、内外の國に薫るなり、内外の國にかをるなり、』

○扇の的

初段

屋島の内裏のこなたなる、牟禮高松の古家にあたり『火の手ありといふ程こそあれ、』見る〳〵四方に廣がりて、黑煙天をこがしけり、阿波の民部大音揚げて、今の火の手は手過にあらず、敵より火を掛けたりと覺ゆるなり、軍の用意せよとて馳せ廻はる、時は元暦二年二月十八日まだ東雲の程なれば、城中俄かに騷ぎ立ち、上を下へと返しつゝ制止も聞かで混亂し、主を捨て親をかへりみず、我先にと逃げ迷ふ、斯る所に源氏の大將軍、九郎判官義經は、紺地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧に、鍬形打たる白星の甲に、紅の毋衣懸けて、二十四指したる小中黑の征矢を負ひ、重藤の弓に、金作の太刀を佩き黑き馬の太く逞しきに、白覆輪の鞍置きて、畠山重忠、熊谷直實、平山季重、土肥實平、佐々木高綱、其外宗徒の郎黨を引具して、城の追手に寄せ來り、木戸の内目かけて切つて入れば、平家の方にて音に聞ゆる、越中の次郎兵衛盛繼、上總の惡七兵衛景清等、切前を揃へて打つて、出て、追ひつまくりつ受け流しつ、鎬を削り鍔を破り、火花を散して攻め戰ふ、組て刺違ふる者もあれば、眞甲切られて倒るゝもあり、手負を助くる暇もなく、死骸をあぐる隙もなし、互に名ある勇將、猛士が、爰を專途と爭ふさまは、何時果つべしとも見えざりしに、牟禮高松の黑煙、次第〳〵に覆ひ來て、已に矢倉も落ちければ平家も今は叶はじと、各船に取り乘て、沖を遙に漕ぎ出てぬ、『行方定めぬ浪の上、須磨や明石の浦々も、寄るべき渚の捨小舟、おきふしなれもしらま弓、いつしか今は引かへて、今日の味方も明日の敵、敵か味方か矢か楯か、淵瀨も知らぬ舟の中、心細くも帆を揚げて、風に任する身の上は、思ひ知られて哀れなり、』爰に平家の陣より、花やかに飾りたる一葉の舟、渚に向ひて漕ぎ寄すゝる、頃は二月二十日の事なれば、霞も風に打なびく、柳の姿に、紅の袴着て、袖

笠被ける女房あり、日の丸の扇を杖に挿み舟の舳頭に指し立てゝ、是を射よとぞ招きける、此女房こそ、建禮門院の后立の時、千人の中より撰まれたりし玉虫の前舞の上手と聞えけり、歳は今年十九歳、雲のびんづら霞の眉姿貌に至る迄、繪にかくとも爭てか筆の及ぶべき、折節夕陽に映きて、いと〻色こそ增りけれ、鬼を欺く丈夫が、互に生死を爭ひて、船と陸とは立分れ弓矢たばさみ、拳を握り、にらみ合ひたる折にしも、あな面白の景色やと、人皆ともにいひはやす、そゞろ浮き立つ人心、波も玉散る海の面に、花に霞に別れ來し、都の春のことをしも、思ひ浮べて眺めつゝ、判官是を見給ひて、畠山重忠を召され、あの扇射よといふに、射ずしておくも無念なり、汝一矢に射落せとありければ、畠山重忠畏りて、君の仰家の面目、こよなき事と存ずれど、是は申々敷晴のわざなり、重忠打物取ては鬼神といふとも、更に辭退は仕らず、弓矢の業はつたなく候へば、もしも射損じて笑を受け候はゞ、重忠の恥はさることなれども、源家一族の御瑾瑕と存ずるなり、そもゝ下野國住人那須太郎助宗が子、十郎兄弟は、弓矢の達人と承れば、箇樣の小物に賢く仕らんと申しければ、直に十郎をぞ召されける、十郎畏り御諚の上は、子細申す可くも候はねども、去年一の谷落のとき、弱馬くして弓手の臂を、砂につかせ侍りしが、疵なほ癒えずして定の矢仕るべくも候はず、弟與市宗高は、一定仕り候はん、仰付られ候へと、弟に讓りてぞ扣へける』

二　段

宗高其日の裝束は、紺紺の垂直に、緋威の鎧着て、鷹角反甲猪首着のなし、廿四指したる、中黑の矢を負ひ、重籐の弓を持て、赤銅作りの太刀を佩き、宿赫

白馬の馬の逞しきに、洲崎に千鳥の飛び散り、たる『具鞍置きてぞ乘たりける、』判官の召に從ひ、馬より下り甲を高紐にかけて畏る、判官申されけるは、あの扇仕れ、晴の所作なるぞよ不覺すな、宗高承り子細申さんとすれば伊勢の三郎、後藤兵衛など、面々の故障に、日も早や暮れんとす、兄の十郎さし申したる上は、仔細申すまじ海上暗くならば、ゆゝしき味方の大事なり、疾く急き玉へと云ひければ、宗高せん方なく、甲を童に持たせ、烏帽子引立て、薄紅梅の鉢卷きして、手綱搔くり、扇の方へぞ向ひける、生年十七才の若武者なれば、色白くして小髭生ひ、弓の取樣馬の乘姿、優なる男にぞ見えたりける、波打際に打よせて見れば、弓手の方には主上を初め奉り、國母建禮門院北の政所、二位殿、官女、其外船を漕ぎ並べ、櫻梅桃李と飾られて、屋形の前後、御簾も几帳もさゝめきたり、妻手の方には、平家の大將軍、大臣殿を初めとし、平大納言敎盛、新中納言知盛以下、平家の一門其の餘の諸將居ならびて、數百の兵船を乘淨べ、鎧の袖を列ねて之を見る、後の方には源氏の大將軍、九郎判官義經を始め、士大將に至る迄て、各駒を乘据えて、拳を握りかたつ呑み、嗚を靜めて音もなし、遠近皆遠淺なれば、鎧の菱縫の板敢爪の濡るまで打入れて、はやりにはやる我駒を、手綱ゆり据えゆりすえ鎭むれど、寄する小浪に物惧れ足も止めず狂ひけり、扇の方を見渡せば、あはい七段ばかり隔てたり、折しも西風吹き來り舟は波間に漂ひて、扇も串に定らず、風のまに〳〵廻りけり、』宗高運の極りと、眼を閉ぢ心を靜め、南無八幡大菩薩、別けては下野國宇都宮那須大神明、弓矢の冥加有るならば、扇を坐席に定め玉へ、源氏の運盡き、家の果報も是れまてならば、矢を放たぬ先きに、海中に沈め給へと、心に深く祈念して、眼を開き打見れば、風も少しく吹弱

り、扇も座席に定りぬ、さては神力指添へたり、我が物なりと思ひつゝ、矢比は少しく遠けれど、十二束三伏の鏑矢拔き出し、重藤の弓に打番ひ、暫し固めて思ふやう、扇の面の日の丸は、日を射るの恐れあり、要のほとりを射きらんと、心を靜めて切て放つ、其矢海上遠く鳴りひゞき、狙ひ違はず要より、一寸ばかり上を射切たり、要は船にとゞまりて扇は空に舞ひ上り、暫しかの程はさまよへて、海へ颯とぞ落ちにける、折節夕日に輝きて、波にたゞよふ有樣は、立田の山の秋の暮、初瀨の紅葉にことならず、源氏は鞍の前輪を叩き箙をたゝき、平家は舷を打鳴らし、どつと揚げたる鯨波の聲、山も崩れて海も湧くばかり、暫しは鳴も止まざりけり、嗚呼宗高が此の日の譽れ、幾万年を經るとても、朽ちぬ程こそ目出度けれ、』

○小松の操

初段

忠孝共に全くし、文武を兼ねて身に具へ、世の變に遭ひ難に耐へ、とにもかくにもあやまらぬ、人のためしはむかし今、多く得がたきものなるを、『嵐に雪におそれずして』遂に操をかへざりし、小松の内府重盛が、世に盡したる心こそ、思へばそゞろ哀なれ、熊野詣での道にして、都の變を聞きしとき、たゆとふ父を勵まして、即ち急ぎ走せじし、待賢門の戰に、强き敵をも事とも せず、進み向ひし其の勇は、平將軍が再生と、人の言るも道理なり、世の名は平治、地は平安、我は平家ぞ、此の三ツの、吉の兆ある此の軍、平定無論と、軍卒の心勵まし進みしは、才智とこそはいふべけれ、『子息資盛若くして、時の攝

政基房の、參内するに遇へるとき、下乘せざるを咎めつる、前驅のものの暴行を、淨海怒りて基房に、再び耻を與へしも、重盛深く之れを慚ぢ、遂に我子をいましめて、伊勢に遠さけ追ひけるは、尙朝廷を尊敬し、禮を守るのみならず、父淨海があやまりを、捕ひ得たりと稱すべく』、おごりし平家の所爲には、さらに似すてゞ殊勝なる、』

二　段

時は治承の御代の頃、西光康賴、俊寛等、ひむがし山の獅子ヶ谷、深く謀りし會合も、思はずわすれし酒瓶の、『口もれ易き世の習ひ』上聞くより淨海怒り立ち、院の御所まで迫らんと、俄に兵を催せば、一族郎黨ことごとく、思ひ々〳〵のの出て立に、物見かため弓矢取り、馬よ旗よとさわぎ立ち、走集まれる人々は、西八條の邸の內、樣に居こばれ、庭に立ち、熊手薙鎌、とり〳〵に、ひしめき、あひてぞ見えたりける、此時內府重盛は、主馬の判官盛國が、息まき來りて事のさま、つぐるを聞けどおどろかず、靜に直衣取りよそひ、車副まで物具は、一人も見せずして出て來り、大將宗盛出迎へ、袖をひかへて言へらくは、今かばかりの大事あり、入道殿さへ甲冑を、既に帶しおはせるに、御裝束は如何にぞと、言はせもはてず重盛は、そも大事とは何事ぞ、國家に係る事をこそ、大事とは云へ、是は只、一家の私事といふべきのみ、又重盛は大臣の、貴き職を帶びたるに、近衛の大將又重し、みだりに物具すべきかと、尻目にかけて過ぎ行けり、淨海はるかにこれを見て、法師に似氣なき身のさまを、さすが心にはじつらん、黑染の素絹を取りあへず、引かけ着たれど金色の、かくれもあへず見えけるを、絹ひき合せつゝみても、包み兼ねたる胸の

内ほころばしてぞかたらひける』

三段

重盛つく〳〵父の顔、まもりつゞけてありけるが、あふるゝ涙おしぬぐひ、容改めいへる樣、嗚呼此日の御有樣、現の事とも思はれず、平家の運も今日は早や、『既に限りの時ならむ』重盛が世も之れ迄と、思ひ定めて候へば、意の中にある事も、殘らずこゝに申さん、御心靜めて聞き給へ、そも此世の中に、四恩と云ひて重大の恩は四つある其中に、朝恩を以て重しとす、普天天下は廣けれど、いづれが王土にあらざらん、卒土の濱も王臣にもるゝものなき理は、元より心得ましまさむ、我が家の祖、貞盛は、天慶の賊將門を討ち平げし功あるも、勸賞受領に猶過ぎず、又御父の刑部卿、得壽院造進の、賞典をもてゆるされし、内昇殿すら世の人は、みな驚けりと申さずや、去るを太政大臣のうへなき御身となり給ひ、重盛輩の身を以て、猶總門の列に加り其上國郡大半は我一門の田園たり、この大恩はいづくより、うけたるものとおぼし召す、此事をもかへり見ず、そゞろいかりをかけまくも、賢こき院の御所にさへ、移さんとする御心は、物に狂はせ給へるか、若し父君が此事を、おしてもなさん御心ならば、重盛はたゞ意を決し、院中守護に參らんのみ、かくするときは人の子の、父に刃むかふ道理なり』嗚呼かないかな君が爲め、忠ならんとすれば、孝を欠き、また家のため、孝ならんと欲すれば、不忠不臣の名を負む、是を思へば、重盛が、進退すでにきはまれり、願はくは今重盛が、頭をめされ賜らん、然して後は、父君が、おもほすまゝにあるべしと、且つ論じ且つなげき、一心こめて云ひ放ち、再びこらへず泣き伏せば、一座の

人も皆共に、涙にくれて言葉なし、さしも暴威の入道もことはり迂めし誠には、いかで爭ふことを得ん、然らば今は何事も、われはいはし院參も思ひとまりてありぬべし、素より子孫のためにこそ心もさわげ吾れは只、老いて後世に望なし、汝よろしく量へと、いゝすてゝこそ入りにけり、『嗚呼、此小松の、枯れずして、大樹と、榮へ、大宮の、柱となりて世にありせば、木曾の嵐もさゞかりは、意ひのまゝに吹かさらむひるが小島の荒浪も、たやすくたちは起らじを、世の浮きふしを、思ひねの夢に三島の神まうて、法師の首も見たりけむ、世の行末も白波の、千々にくだくる岩田川、淨衣に透きし薄襖、の鈍色をさへよろこびし、心よわきはをしけれど、忠孝文武完全の、良臣の名は其殿に、連ねかゝげし常燈の光りよりげにまさやけく、『世々を照して臣の子の、かゝみとこそはなりにけれ』鑑とこそはなりにけり、』

○吉野落

初段

美吉野の、花も龍田の紅葉も、夜半の嵐に誘はれて、仇に散り行く時は、又『增て哀に思ふなり』爰に二階堂出羽の入道々蘊は、元弘三年正月に、六万餘騎を隨へて、大塔宮の日頃より、籠らせ給ふ大和なる、吉野の城にぞ攻め寄す、る、榮摘川の邊より、吉野の方を見上れば、赤旗白旗錦旗、深山嵐に打靡き、雲か花かとあやしまれ、麓には敵の大勢隙間なく、甲の星を輝かし、鎧の袖をつらねしは、錦を敷くに異ならず、峯高ふして道細く、山險して苔滑かなり、幾千万の鋭兵が、必死となりて攻むるとも、たやすく落つ可しとは思はへず、斯る處に同敷十八日卯の刻より、兩陣堂と鬨を擧げ敵攻め上れば攻め

下し、互に勇氣を振ひつゝ、爰の谷彼方の峯に走せ散りて、攻め合ひ開き合ひ、射手をそろへて散々に射立たれども、寄手の者は命を知らぬ坂東武者、親討たれても顧ず、主斃れても取合はず、屍を乗り越へ〳〵七日が間、息をも付かず攻め戰ふ、血は草丱を染め、屍は路頭に横たわる、斯かる處に寄手の案内者、岩菊丸は足輕共に下知をなし、金峯山の嶮を越へ、木の根岩角よぢ登り在所〳〵に火をかけて、鯨波をつくつて攻めければ、城兵も今は、前後の敵を防ぎ兼ね自害する者もあれば猛火の中に走入て死する者もあり、向ふ敵と引組んで差違ふもあれば宮に注進するものもあり大手の堀は忽ちに死骸を以て埋めたり。宮は此由聞し召し、赤地に錦の直垂に、緋威の鎧着て、龍頭の甲を召させられ、三尺五寸の長刀を小脇に挾み屈強の兵共二十餘人前後左右に引き給ひ、群がる敵に切て入り、砂子を飛ばし烟を立て、東西を打拂ひ南北へ追廻はし、爰を專途と戰ひ給へば、寄手の大兵共、此の二十餘人に切り立てられ、木の葉の散る如く四方へ颯と散りにける、宮は之れより藏王堂の大廣間に、悠々と引きあげ給ひて、軍兵と最後の御酒宴をば遊ばさる、此の戰に宮の召したる御鎧は、七筋の矢に射貫かれ、頰先きと二の腕に、三ヶ所の突傷、負はせ給へど、立ちたる其の矢をぬかせ給はず、流るゝ血潮もぬぐはせ玉はず、敷皮の上に立ちながら、大盃を三度迄で傾け給へば木寺の相摸、四尺三寸の太刀先に、敵の頭を指し、通し宮の御前に畏り聲高らかに歌ふ樣、戈鋋劍戟を降らすこと、電光の如く、盤石岩を飛ばすこと、急雨の如しと雖も、天帝の身には近かず、反て修羅彼がために破らると、太刀振りかざし舞ひたるは、漢楚の鴻門に楚の項伯と、項莊と劍を振いて舞ひしとき、樊噲庭に立ちながら、幕をかゝげて項王を睨みし勢

も斯くや覺ゆるばかりなり』

二　段

去程に村上彦四郎義光は、餘り烈しく戰ひて、敵に矢十六筋を射付けられ箙中の節や袖づりの、節より折れて立たるは、枯野に殘る玉萩の『風に靡くが如くなり』其の矢を拔くに暇まなく、宮の御前にひれ伏して、一ノ木戸は早や破れ、今二ノ木戸にて支ふれど、連日の戰に軍兵共も打死し、迚も籠城覺束なし、『敵の四方を圍まぬ中早く落ちさせ給ふべし、臣は恐れ多き事ながら、召させられたる直垂や、御物の具を頂戴し、御諱をも犯し參らせて、茲に戰死を仕らんと、忠義面にあらはれて、最と懇に申上ぐれば、宮は哀げに思し召し、爭てか去る事のあるべきぞ、死なば處をかへずして、吉野の山に、

かんばしき名を殘さんと宣へば、義光聞きもあへず、嗚呼淺間敷き仰せかな、昔漢の高祖が滎陽に圍まれし時、紀信高祖の眞似をなし、楚を欺かんと言ひたりしに、高祖は之を許したり、是等の御覺悟あられずして、天下の大事を能くも思し立たれたり、早く御物の具を下し賜はれて、御鎧の上帶を解きまつれば、宮はげにとや思召けん、御鎧も直垂も、脱かせ給ひて義光に手づから渡して宣ふやう、我若し生き伸びたらば、汝が後生を吊らはん、又打死なしたらば、同じ冥土に伴ふべし、是今生の別れぞと、言葉少なく宣ひて、涙ながらに落させ給ふ、』義光はせきくる涙押へつゝ、木戸の櫓に走せ上り、大音揚げて名乘るやう、我は之れ、神武天皇より九十六代の孫、今の帝の第三の皇子、一品兵部卿尊仁親王なり、逆臣ばらに惱まされ、恨みを泉下に報いんため、只今自害する所なり、是を見て汝等が身に備へたる武運つき、

腹を切らん其の時の手本にせよと呼ばはりて、鎧を脱げ下し、錦の直垂に練貫の二重の袖を引きつくろげ、兩肩脱いで一刀を左の腹にぐつと立て、直一文字に引廻し、朱に染みたる腸を、檜の板に投付けて、太刀先くわへうつ伏に伏して果てたる義光が、最後の樣こそ勇ましけれ、敵兵是を見て大塔の宮は、御自害召されたり、御首給はらんと云ふ儘に、四方の圍を打すて、、檜の下に馳せ集る、宮は之れと引違ひ、天の河へと落させ給ふに敵五百余騎道を遮りければ、義光の一子村上兵衛藏人義隆は、父の敎へに從ひて、一人玆に踏み止り、追ひ來る敵の馬の諸膝薙では切りすえ、平頭打ては刎落し右に突き左に蹴倒し、飛蝶の如く飛び廻り、猛虎の如く猛り立ち、九折なる細道に、五百余騎を引き受けて、半時許り支へしが、如何に義隆、強のものとは云へ身鐵石にあらざれば、深手の矢疵、十余ヶ所、薄手のきづは數知れず、今は是迄とや思ひけん、竹村に走り入りて、腹掻き切りてぞうせにける、此の隙に宮は虎の口をのがれ玉ひ、高野山へ落ち伸び給ひしは、村上父子が美吉野の、花と散りしに其の功を立田の秋の紅葉葉の、赤き心によるとかや赤き心に依るとかや、」

○鎌倉の宮

初段

山の端出づる秋月も、浮き雲のためには其の光を失ひ、籬に匂ふ薫闌も、狂風のためには、「其の香を敗らるゝ習ひあり、」建武中興の大業も、足利兄弟の叛逆によりて、成就せざりしこそ、實に千載の遺憾なれ、扨ても足利尊氏は、護良親王の英資を忌みそをなきものにせんとてや、繼母淮后に旨を含め、親王不覬を圖るとそ、密に奏聞せしめける、帝逆鱗まし〳〵て、宮を流罪に

處すべしと、中殿の御會にことよせて、それとはなしに招きよせ、馬場の御殿に幽囚の身となししこそ、墓なけれ、蜘手結ひたる一間の中、泪の床に起きふし給ひ、如何なれば我が身元弘の始めには、武家のために身をかくし木の下岩が根に、露しく袖をほしかね、歸洛なしたる昨日今日、讒言聰朋を蔽ひ奉り、縲洩の辱めを受くるやらんと、知らぬ前世の報いまて、殘す方なく思し召し、虚名空しく立たずと聞けば、若の御心解し給ふ、時もやあらんと、頼まれぬ頼みを仇に頼むこそ、世にも悲しき極みなれ、さる程に公議遠流ときまし、かば、宮は御悲に堪へず、心の丈けを認めて、心よせたる女房して、急ぎ帝に奏聞せしめぬ、其文に申さる樣、往にし承久の昔より、朝廷の政權武門に移り、專横殊に甚しかりければ、護良不肖の身を以て、慈悲忍辱の法衣をとき、怨敵降伏の堅甲を着け、君の爲めには身を忘れ、敵に向ふて死を恐れず、晝は終日深山幽谷の中に臥して、岩上の苔を衾とし、夜は通霄荒村遠里に出でゝ、野路の霜を踏みくだき、龍の髭を撫でゝは魂を消し、虎の尾を蹈みては胸を冷せしこと、數知れず、元凶遂に誅せられ、龍駕都に立還り、王政維新の世となりしは、御運の強きためとは云へど、又護良の忠功も、あづかりてこそありつらめ、中興の帝、業尚未だ、一簣の功を欠く際に、讒誣忽ち聰明を蔽ひ、罪實悉く護良が身に集るゝこそ無念なれ、仰て天に訴れば、月日不孝の子を照さず、腑して地に寄すれば、山川無禮の臣を載せず、天地神明共に棄て、父子の情緣も絶え果てぬ、四方の國邊は廣くとも、身を容るべき場所もなし、申生死して晉國亂れ、扶蘇刑せられて、秦世傾くこそ、聞きつれ、古き例しを鑒みて、今日より後を推しはかり、護良が竹の園生の名を削り、柔の門邊の身とならしめ給へ、とぞ書きつけゝる、此文若し上聞に

達せしならば、父子の情御宥免の御沙汰もありけんものを、心なき傳奏共は、諸の怒りを恐れて、中間に止め置きしぞ、是非もなき、同じ宮中にありながら、上天所を隔絶し、訴願更に啓けずして五月三日といふ日には、惡逆無道の直義が、手に渡されしぞ無慘なる、直義は五百余騎の兵を以て、路次を嚴しく警衛し、鎌倉に連れまつり、二階堂の土窟にぞ、深くも押籠め參らせける、南の方と申しつる、上臈一人より外は、附そふ人も荒莚、日光さへも見へわかぬ、世も常闇の室の内、よこぎる雨に御袖濡し、岩の雫に御枕をも乾かしかねてぞ、六月許り過こし給ひし御心の、中こそ實にも哀れなれ、』

二　段

去る程に直義は、山の内、を過くる時、淵邊伊賀を近つけて、密かに語り出づる樣、世は足利となりつべき、時も遠くはあらざれど、當家のために行末の、讎となるべき其のものは、『護良親王にておはすなり、』宮を死刑に行へと、朝廷よりの御許しは、未だ御受致さねど、好機兎角に逸し易し、御身は急ぎ二階堂ヶ谷に參りて彼の宮をなきものにせよと下知すれば、淵邊委細承り、土窟指して急きける、宮は此の時常暗の、夜の如くなる土牢の、中に夜明も知らせ給はず、猶燈を挑げつゝ、御經遊ばしてぞおはしける、淵邊御輿を庭に据え、御迎に參りつる由申しゝに、宮は之を御賢じて、汝こそ我を失はん爲めの使者ならめ、心得たりと立ち上り、淵邊が太刀を奪はんと、走りかゝらせ給ひしを、淵邊忽ち身をかわし、太刀取り直し、御膝の邊りをしたゝかに打ちにける、半年ばかり土牢の、中に屈みし御身なれば、心は八十島にはやれども御足さへも自由ならず、遂にうつぶしに倒されしこそ、無念なれ、淵

邊上に打跨り、腰の刀を引拔きて、御頸をばかゝんとす、宮は御頸縮められ、刀の鋒嘲へされ、押せども引けども放させ給はず、淵邊も今は必死となり、力まかせに爭へば、刀の鋒一寸ばかり、噓止とばかり折れたり、淵邊差添引き拔きて、御胸元二太刀許り、柄も通れと差しければ、流石の宮もよはらせ給ふ、やがて御頸搔き落し、御髮掴みて走り出て、明るき所にて見奉るに嚙ひ切らせ給ひつる、刀の鋒口中にとゞまり、御眼尙生けるが如くなり、暴逆無道の淵邊なれど、其の樣に畏れをなし、かたへの藪に投げ棄てゝ、立歸りしこそ無慘なれ、御前に候ひし南の方は、此有樣を御覽じて、余りの恐ろしさに、身もすくみ、手足もたゝておわしけるが、やがて人心つきければ、藪の中なる御首を、靜に取り擧げ給ひしに、御膚は、猶冷えず御目も塞がせ遊ばさず、元の氣色に見えければ、若し夢にてやありつらん、夢ならば覺むる現のあれかしと、泣き悲しみしこそ、道理なれ、竹の園生の人となり、忠勇無双の資を以て、建武の大業を助けなし、有らゆる辛苦をなめ給ひて、空しく賊の手に殞れ、鎌倉山頭今も尙、遺恨の雲を殘し玉ふ、御心の內こそ悲しけれ、二階堂の土窟の、中に遺したる宮の御魂は、後の世の、大和男子の鑑として、鎌倉宮の宮柱、太しく建てゝ、覺さへ、昇る旭にかゝやきて、官幣中社と仰がる、明治の聖代こそめでたけれ、明治の聖代こそめでたけれ』

○島原合戰

初段

國を申せば、肥後の國、在所を記せば割府と云へる、扨て在所に赤星源氏綱明とて、『弓取一人をはします、』其の比肥前に深く味方召されける、其比年の

年號申せば、天正九年辛巳の年、比は卯月七日と申すに、肥前の國主、龍造寺山城守隆信方より使者の參るいかに申さん赤星殿、主君の爲め誠に肥前に味方召さるゝ者ならば、人質を給はれとの御諚なり、赤星言葉に、國主の御意とは申せども、誰をか質に參らせん、其時使者の言葉に承れば年は十四に成らせ給ふ、松若殿とて若のあるよし、肥前屋形に隱れなし、彼の若を質に給はれ、赤星殿とありければ、赤星言葉に、若を一人持つては候へ共、彼の若を質に渡しては、跡の歎きは如何せん、去れど又、國主の御意には叶ふまじと、若を召し寄せ御尋あれば、若の言葉に、某國にあるならば、二人の親の御奉公、又は國の替りとなるならば、質に渡らん事、御心安く思召せ、頓て御供の、士十八人を召連れ、肥前の如く御渡なされ、佐賀の屋形に伺候有るこそ、中々物の哀れなり、未だ三日を過ぎざるに、重ねて使者の參る、いかに申さん赤星殿、承れば年は八つに成らせ給ふ、安千代殿迎姫の有る由、肥前屋形に隱れなく、未だ幼少なれども彼姫を、質には給る物ならば、若の所は國の如くに、返すべきとの御定なり、赤星言葉に、扨ては中々若を一人出してさへ、跡の嘆きは如何せん、況してや幼少の姫を質に出しては、跡の嘆きは猶増さる、去れ共國主の御意には叶ふまじと、姫を召し寄せ御尋ねあれば、姫の言葉に二人の親の御奉公、又は舍兄樣の御身代りとなるならば、京鎌倉迄も登るべし、況や肥前と肥後は近き間と承る、質に渡らんこと御心安く御思召せ、頓て女房六人十三人を召し列れて肥前の如く御渡りなされ、佐賀の御内に兄弟共に伺ひ候有る社、何より物の哀れなり、是は扨置き、爰に又、肥前に於てつれなき士、隈部左馬介親興と申せしは、三とせ以前赤星殿と境の論を召れしが、痛しや隈部殿、召負なれば赤星殿より、三百余所

を踏み取られ、無念至極はなかりけり、如何にもして赤星に、腹切らせんと思ふ折節なれば、是れこそ能き折柄と心得隆信殿に作り文を上げ給ふ、隆信殿は彼の文を披見せられ、赤星は肥前に兄弟の子供を質に渡し、其のうへながら薩摩に味方、肥前に二張の弓を引くとの文なれば、隆信大きに腹を立ち、其の儀ならば肥前に於ても、法度の仕置きに任せ、生磔と御意下る、痛はしや、兄弟は、肥前屋形に三日も置ずして、肥前と肥後の境なる、南の關竹の夜原に、送り有るこそ何より物の哀れなり、若の言葉に、兄弟共に御殺しあるべし、御殺あるとても、士が塀垣越へて隠れ忍びは致すまじ、士は疊の上に生れ來て、野原に死するか本道とは承れど、夢にも知らぬ野原にて、面は月日に晒されて、長く浮名の立つと思へば、是れ一つのいかんなり、只今敵と引組て、討死すものならば、箇程に物は思ふまじ、いかに申さん隆信様、某は男の身にて、御殺あるも苦しからず、幼少の妹は、國に御返し給はれと、日には三度の詫をなす、姫の言葉に、身らは女の身にて苦しからず、兄が所は赤星か家の世繼の事なれば、國に御返し給はれ隆信様と、日には七度の詫をなす、隆信御定に、如何に兄弟、科なき隆信を恨み給ふな、謀反心の父の赤昔を恨み給へと、御意下る、姫の言葉に、科なき隆信様も恨み申さぬ、況てや父の赤星にも恨み申さぬ、中より作り文を上げたる隠部殿こそ、今生後世の恨なれ、若の言葉に如何に安千代、何某の子孫と云ひて、女にこそは生まれ來て人を恨みては如何せん、死出の山三途の大川左京が橋迄も、一つ道ぞと、喜び給ふこそ哀れなり、若の其日の裝束には、先肌よりは白地練絹、上には紫染に、ひだ色の、くゝり小袴しつかと召され、十八人の士を御側に召れ、いかに旁々鳴を靜め

て聞き給へ、某兄弟は隆信樣より、身に覺へなき科に上意の宣ふなり、迚も上意は逃るまじ、御身達は暇とらする、何國の樣にも落行て、我に增したる剛き主人を賴み給へと仰せける、十八人の士は頭を地に附け、皆一同に言葉を揃へ、嗚呼情なき、若君樣の御諚やな、士が强き時は主人と賴み、今弱きとて君を振捨る法やあらん、兎にも角にも若君諸共にと申上れば、若君斜に喜び、十八人の士に、御盃を給はりける、爰に又姫の其日の出立には、先肌よりは十二小袖を召されける、上着は其頃、肥後に流行りし白糸小袖召し重ね、たけと一世の黑髮は、月の輪形に結ひ給ひ、まげの糸にてみふし留め、頓て六人の女房を御側に召れ、如何に旁々鳴を靜めて聞き給へ、自ら共兄弟は、身に覺えなき科に上意の宣ふ也、迚も上意は逃るまじ、御身達は千に一ッも、隆信樣より御暇給はる物ならば、國の如くに落ち行きて、二人の親の御前に參り、自分兄弟斯々なりたる有樣を、一事も殘らず申上よと仰せける、六人の女房達は、唯涙に咽びて、誰も御返事申す人もなし、痛はしや彼れ兄弟は、頓て檢使を御側に召され、いかに檢使の方、はたの板は古より、定まる法西へ向るが、本道とは承れど、某兄弟は肥後の方へ向け給はれ、左もあらば、割府の在所に二人の親の有ると思へば、吹きくる風までなつかしや、いかに檢使の方と宣へば、檢使の方聞き召され、當城は往古より、傳はる儀式はたの板は、東に向るは天下に恐あり、御身迚兄弟とても、西へ〳〵とありければ、痛はしや兄弟は、もはや力に及ばず、左右の手を差上げ、肥後の方を打眺め、嗚呼なつかしや、割府の御所と、七度招きてはたの板に召されけるこそ、中々物の哀れなり、『彼兄弟は土の義理なれば、三日が間は、小歌拍子にて過させ給ふ、痛はしや姫君は、未だ幼少の事なれば四日に當る酉の